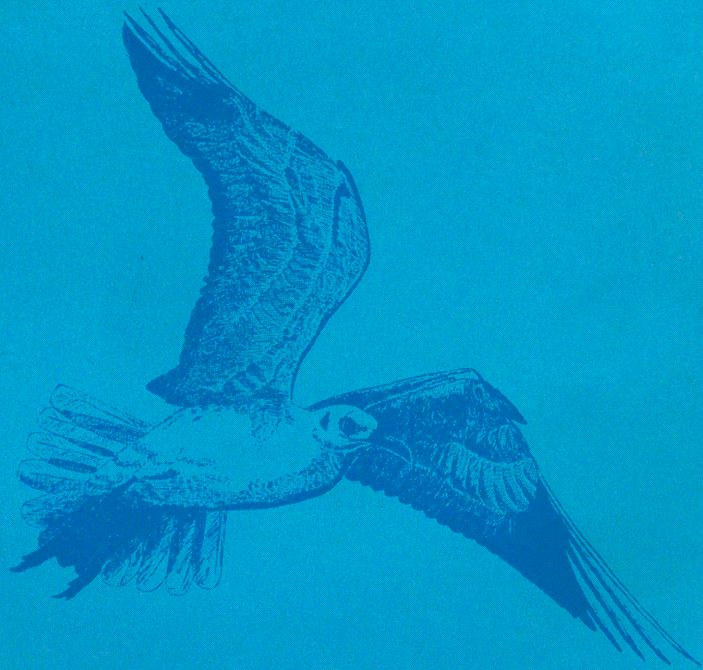


ふじみの



No. 19 1980

東京農大畜友会

巻頭言

畜友会委員長 伊 藤 達 美

昭和五十四年度東京農業大学畜友会委員長と言う大任をこの一年間努めさせていた
だきました。

今、この大任を降り、この一年間をふり返ってみて、活動内容も例年の通りほぼ同
じでした。異ったことと言えば、畜友会会費納入のこと、入学式後のオリエンテー
ション参加、畜産学科旗新調、畜友会会室の移転などです。

他学科の数人に言われました。"畜産学科には畜友会があるから学科がまとまっ
ている"と。

年々変わっていく世代とともに学生自身の考えも変わっています。

しかし、我東京農業大学畜友会の活動、目的とともに活動方針というものを心にき
ざみ、畜友会会員、畜産学科生としてのほこりを持って活動し、他学科にはない畜産
学科だけのものを畜産学科全員で作っていただきたいと思います。

ふじみの 第19号

目次

巻頭言

畜友会委員長 伊藤達美 1

御一報

80年代の畜産 畜産学科長 鬼原新之丞 4
 日本人と鶏 教 授 一戸健司 6
 牛乳の生産調整について 教 授 吉村喜彦 8
 試験管ベビーをめぐる 助 教 石島芳郎 10

厚木農場だより

日誌についての雑感 農場講師 鈴木伸一 14
 石垣島の畜産基地 農場講師 大谷忠 15

特集 1

牧場だよりII 80年代の畜産の指針 鈴木総合牧場 鈴木正 18

photo

バードウォッチングブームに寄せて 農 大 野鳥の会 20

詩・随想

精神分裂者のひとりごと 畜産二年 瑠璃運 22
 秋の夜の伝説 畜産三年 内山たま美 27

夢 畜産一年 中原完 28
 「むなしさ」がこみあげたとき 畜産一年 吉田敏男 28
 かんらばやし 畜産一年 3番目の明子 29
 スガレ追ひ 畜産二年 小椋勇人 31

特集 2

農大かいわいII 私の生がい キッチン・二三モト 西本治子 33
 涙・なみだ・泪 第87回収穫祭 34

DRAWING

宇野仰 36

研究室だより

昭和五十四年度卒業論文題目
 ○家畜種学研究室 41
 ○家畜衛生学研究室 42
 ○家畜衛生学研究室 45
 ○畜産経営学研究室 47
 ○家畜飼養学研究室 49
 ○家畜生理学研究室 49
 ○家畜繁殖学研究室 50
 ○畜産物利用学(肉)研究室 52
 ○畜産物利用学(乳)研究室 53

畜友会だより

昭和五十四年度行事報告 55
 昭和五十四年度会計報告 56
 第87回収穫祭役員 57
 昭和五十四年度畜友会役員 58
 畜友会規約 59
 編集後記 64

80年代の畜産

畜産学科長 鬼原新之丞

「畜産は米と共に農業の志向するところとなっている。」と農業白書で報ぜられているが、畜産関係の仕事に携わるものとして、この現実をいかに評価すべきか。過剰と不足が同居している我国農業と言われているが、この間にあって一体畜産物はどうなっているのだろうか。かつて経済の畜産成長と共に所得水準が上昇し、その結果食糧消費の多様化、畜産化が進み、澱粉質食糧から動物性蛋白質食糧へと国民の食生活の嗜好が変わり、畜産物の消費が伸びたが、オイルショック以来、高度成長から安定成長へと移行した今日事情が変わりつつある。今日では更に省エネルギー時代に入り今後低成長化の国民の消費支出は極めて健全なものになり食糧消費としても、かつてのような高い水準での消費の伸びは八十年代では期待出来ないと考えられ、今後は畜産物も米と同様に過剰傾向となってくると考えられる。この過剰傾向の中で更に、輸入自由化や輸入枠の拡大が強く迫られてくるであろう。

今、国内には大いに自由化して安い食糧を多く入れるべきである。又日本経済の立場から言えば農業も国際化を目指すべきであるという考えがある。言うまでもなく、食糧は、人間

生存に欠くことの出来ない、絶対的なものであるから、いかなる国においても、その人口を養うだけの食糧の生産は是非とも行なわれなければならないし、いかなる国においても現在行なわれているのであって、これなくしては国の独立を論ずることは許されない。食糧の自給を犠牲にしての工業化は間違った政策であると考えられる。今後の農業及び畜産は大きな転換期に立ち、再考されなければならない。八十年代の畜産はその量よりも質に重点を置き、畜産経営における経営改善、自給飼料の開発、国土の再開発、更に流通段階の合理化を確立して、国際的にも競争力のある畜産にしなければならない。

このためには、我国農政の仕組を変える必要があるが、畜産人自身の努力により我国独特の畜産技術を打立てることが必要と考えられる。この畜産技術の担い手として畜産を目指す若い諸君に期待するところが窮めて大である。

諸君の清新な意欲と気迫とが今後の畜産安定発展のため要求されているのである。当畜産学科の教育目標は、技術者の養成であり、前農場長・鈴木正三先生の御努力を戴き富士農場がさらに三十三ヘクタール増加し畜産牧場として建設されることになり、さらに進んだ実習研究ができるようになることは誠に有難く喜んでおります。諸先生方の御協力を戴き、八十年代の畜産を目指す諸君が高度の知識と技術を修得できるように、学科の一層の充実に微力ながら努力する所存である。

日本人と鶏

教授 一戸健司

最近日本鶏愛好家とお会いする機会が頓に多くなって来た。然し申し合せた様にその殆んどが六十才を半ば過ぎた御年輩の方達である。彼等は異口同音に昨今公害問題がやかましくなつて来たので鶏の飼育が困難になつて来た事と、鶏に対する若い人の関心が極めて薄い事を訴える。

さて、これらの愛玩鶏は果たしてどんな人達に飼われているのであろうか。展覧会でお会いした帰路などに鶏を進呈するから寄つて呉れとお誘いを受ける事がある。御言葉に甘えて参上すると、これらのお宅の多くは軒下や物置の片隅などに小さな小屋が所せましと設けられており、どうみてもあまり裕福な暮しとは御見受け出来なない事態に直面する場面がある。「大学に研究用として進呈するのだからむしろ名誉な事なのだ。金など絶対受けとれない。」と言われて御寄贈を受ける件となるのだが、その結果何んだか罪深い事をした様な錯覚にとらわれ、複雑な気持ちで家路を辿つた事が何回かあった。

同じ日本趣味とは言つても、錦鯉の場合にはその飼育

している層が違っている。彼等の中で顔をきかせているのは政界のボスや医者等所謂、金に物を言わせる連中が多く、住宅地域においても広大な邸宅をかまへ、こゝに立派な池を造つて何万、いな何十万もする鯉を泳がせている。鯉は鳴かないから公害の対象にはならない、と言つてしまへばそれ迄だが、然らばけたゞましい鳴き声を発する犬が住宅の密集している地域にも広く飼われているのは如何なる理由によるのであろうか。然も可成り裕福な家庭がその対象となつてゐる。

私の友人であるフィリピン大学のパンチョー教授は、私が前後三回に分けてプレゼントした桂チャボを自宅の緑の芝生に放飼し、その愛らしい姿を誇らしげに友人達に自慢している。それに引き換え、日本では何故広大な庭園に長尾鶏や小国などを放飼し、その優美な姿を愛でないのであろうか。泉水に面した松の枝や石燈籠に長尾鶏を止まらせ、これを愛でる審美眼を最早日本人は失つたのであろうか。

私は長年鶏を対象として仕事を進めて来た関係上日本鶏保存会や日本家畜会の方々とも御近づきになっている。こんな関係から農大には可成りの羽数の日本鶏や洋種鶏が導入され、特に厚木農場でのコレクションは一見に値する迄に進展させる事が出来た。

農大のシンボルマークは鶏とされている。即ち農大と

鶏とは切つても切れない関係にあるわけである。神奈川県日本鶏保存会ではかねてよりこの厚木農場での日本鶏の飼育に着目し、これをよりどころにしてこの会で例年実施して来た展覧会の開催をこの農場でやらせて欲しいと要望して来た。この様な試みは学生諸君の鶏に対する関心を高めるのみでなく、引いては農大のPRにもなると思ひ、去る十月十三・十四日の両日同保存会との共催で展覧会を実施する運びとなつた。

大学の行事の関係から、その期日が換羽期と言ふ鶏にとって是最悪の時期に実施したにも拘らず当日は多数の出品鶏があり、その上農大OBの養鶏関係者で結成している「東京農業大学養鶏懇談会」の例会をこの期間に農場で開催した事も重なり、会は稀に見る盛会裏に終了したが、とりわけ小生担当の「家禽論」の一部として見学してもらつた畜産三年生の熱心な見学態度が、保存会の人達の話題を独占したとの事であつた。

学生諸君は、私の指示したリポートの提出、さらにそれに関する次週の講義に予定しているディスカッションに対応するため、その見学には一段と熱が入つた。彼等は保存会の人達は言うに及ばず、当日に備へ先頃から講習を受け審査補助として活動している級友をつかまえては、誰彼となく質問を連発した。

保存会の人達にとつてはこの様に活発な展覧会の開催

は初めての経験であつた。その刺激に感動した彼等はその後何回となく会合を開き、今迄のたゞ経験だけに頼りそこに何等学理的な裏付のなかつた態度を反省したと言ふ。彼等は今迄鶏に興味のあるのは年寄りだけ、若い人にはあまり縁のない物と思つていただけに、若い学生諸君がこの様に熱心に参加して呉れた事を涙さんばかりに喜び、中には長生きした甲斐があつた、これで俺達が守つて来た伝統は受継がれると感激した人もあつたとかきいた。事実審査補助のため彼等と同宿した学生の中には一名の長髪族も居らず、極めて実直なメンバーであつた事が彼等の共感と呼んだ様に思われる。

さて、こう迄持ち上げられた学生諸君であるが、果たしてその成果はどの様であつたであらうか。確かに現地における点呼、リポートの提出、次の授業でのそれに関するディスカッションと可成りの制約を設けはしたが、学生諸君にとつてはそれなりの効果はなかつたであらうか。少くとも出品鶏の中から二・三の天然記念物に指定されている品種の事は脳裏に刻み込まれたものではあるまいか。もしこれがチャンスとなつて何人かの学生が日本鶏や洋種鶏に興味を持ち、将来飼育して呉れる様な事態でも起これば、天然記念物に迄指定され、世界に冠たる日本鶏の保存維持に幾分なりとも貢献し得た事になる。従つて私の試みもそれなりの意義があつたと自負し得る。

牛乳の生産調整について

教授 吉村喜彦

はじめに

米の生産調整が始まって五年目に入った一九七九年の春、突然政府は牛乳の生産調整を発表した。これは十大ニュースの一になるニュースバリウである。

牛乳生産過剰の実体は何か、それは構造的過剰か一時的需給アンバランスによる過剰かの論争やその対策についての検討がなされて久しい。今、ここでそれらを回顧しながらとりまとめたいと思う。

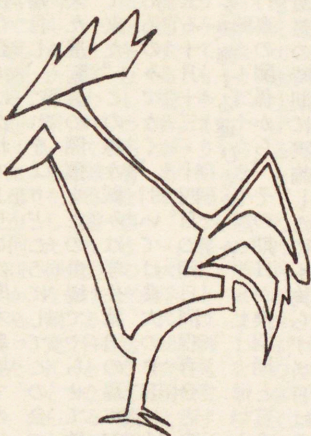
1. 牛乳生産調整の内容

一九七九年三月三十日・三十一日の日本農業新聞は、牛乳過剰解消への道として次のような政府決定を発表した。

- ① 加工原料乳保証価格は、五十二・五七三年に引き続き五十四年度も八十八円八十七銭と据え置き。
- ② 五十四年度の生産者補給交付金に関する加工原料乳の最高限度数量を一九三万トンとした。
- ③ 生乳消費拡大その他需給調整のための必要な対策推進のため三十三億円を計上した。乳質改善奨励金キロ当り一円七十五銭を廃止。

私達は、来年からは鶏の健康状態の最もよい五月頃に農場で展覧会を開催する様計画を進めている。この行事が固定化し、そのPRが徹底すれば「鶏の事は農大に問い合せばよい。」又「鶏を見なければこの展覧会を見に行くのが一番手取り早い。」と言う様に事態は進展し、農大のPRにも寄与し得る事と私は期待している。

今年審査を手伝った学生諸君は、来年は正式に審査に参画出来る様保存会としては取計らうときいた。このまゝたゞ一回限りの審査員で終る事なく、毎年何名かの学生が新たに審査に加わって欲しい。そしてこれらの若い人達を通して日本鶏の保存維持が次第に浸透して行く事を切に祈って止まない。



④ 五十四年度以降は、限度数量を超えて加工原料乳へ補給を支払わない。

⑤ 酪農経営の合理化と負債軽減のため一〇〇億円（農家負担利子四・六％、償還期間五年の中一年据え置き）の低利融資を行なう。

2. 牛乳生産過剰の特質

生産過剰というのは、一般に米の豊作現象によって生ずる需給のアンバランスを想像するのであるが、牛乳の生産過剰はこのような一時的現象たとえば、円高によって輸入飼料が値下りし、酪農家の生産意欲を刺激し生産増加に結びついたということが一部あったとしても、それは基本的な原因ではないのである。むしろそれは、生産経済上の構造的現象としてみなければならぬ。

3. 牛乳生産の経済構造

わが国の牛乳は、飲用乳と加工原料乳とに区分され、取引価格は、キロ当り前者一一五円、後者八九円というように、その価格差が大きい。そこで、加工原料乳生産者補給等暫定措置法を制定し、加工原料乳生産地帯（北海道全域と本州の山間部）の酪農家に補給金（不払足制）をだしている。その財源は、畜産振興事業団が行う乳製品の輸入業務によって集められる関税及び課徴金であり、その輸入量は年々漸増している。因みに、一九七八年度は、加工原料乳生産の国内仕向約二二一万吨に対して、

輸入乳製品類の量は約二五九万トンであり、国内産をはるかに越える輸入量であった。また、わが国乳業の特質は、飲用牛乳の生産が中心（牛乳生産量の六〇％）であって、乳製品の生産は、飲用牛乳の余乳を利用するというのが企業方針である。飲用牛乳が余れば加工用にまわされ、牛乳の過剰は、乳製品の在庫という形となってくる。この乳製品の一部は、畜産振興事業団によって買上げられているが、国内生産の乳製品の滞貨と輸入乳製品の増加とが、牛乳の生産過剰を人為的に作りだしているのである。

4. 酪農民の主張

以上のような状況の中で、酪農民は次のように主張している。

- ① 乳製品の輸入規制
- ② 国産チーズの振興
- ③ 牛乳・乳製品の学校給食の拡大
- ④ 飲用乳の消費拡大を酪農民自体が進める。（たとえば、列車・ホテル・ドライブイン・旅客機等の直販の拡大）

むすび

前述のように、牛乳の過剰生産が構造的な現象であるとしても、日本人の牛乳消費量は国際的にきわめて低い位置にある。牛乳は飲用のみが利用法でない。外国のように料理上の利用法を啓蒙しなければならないと思う。

試験管ベビーをめぐる

助教授 石島 芳 郎

この十年たびたびマスコミに取沙汰されていた「試験管ベビー」が、一昨年七月について実現し、現在都合三人の試験管ベビーがこの世に生を受けている。ルーズちゃん（イギリス、女子、一九七八年七月二十五日）、ドルガちゃん（インド、女子、同年十月三日）、そしてアラスターちゃん（イギリス、男子、一九七九年一月十四日）である。

このいきさつは、マスコミが大々的に報じたので記憶されている方が多いと思うが、これの実現に対しての反響は大変なものであった。「科学の奇跡」、「不妊症婦人に朗報」、「医学の勝利」、「技術的に尚早」、「倫理的問題」、「安全性が不確か」など賛否両論が各紙を賑わしていた。そして今もってその波紋は消えていない。したがって評価もさまざま、これに対して立場のちがう論評がいくつかだされている。

それはともかくとして、医学に新たな技術が開発されたことはまぎれもない。ここでは、試験管ベビーという新しい技術がどのようなものか、現行でどの辺まで容

認されるかを筆者なりに述べてみたい。

すでに報道されているように、試験管ベビー三人のうち、イギリスの二例は、オールダム総合病院の産婦人科医バトリク・C・ステブト博士とケンブリッジ大学の生殖生理学者ロバート・G・エドワーズ博士によって成し遂げられた。氏は、卵管閉塞などで出産の望みのない婦人の卵管内卵子を外に取り出し、しばらく成熟させた後に夫の精液とまぜて試験管内で受精させ、その後培養してある程度卵を分割させ、それを子宮にもどす方法（図1）をみだし、一九七七年後半から七八年にかけて三十二人の不妊症患者に実施して、先の二人の赤ちゃんの誕生に成功したものである。

この方法でわかるように、試験管ベビーといっても、いわゆる卵管内で行なわれる受精・胚発生の一部を体外で代行させたもので、試験管で子供をつくるといったSFじみたものではない。したがって正しくは試験管内受精児もしくは体外受精児と呼ぶべきものであろう。

氏が用いた技術は、大部分ヒト以前に実験動物で成功しているが（表1）、ヒトの試験管ベビーにあたるものはウサギとマウスにしか成功していない。時機尚早の批判は、動物実験の不足から安定性に疑念がもたれたことによるらしい。勿論、氏は綿密な基礎研究と経験から実施にふみきったもので、それ相当の苦勞の結果であ

ったことはいりまでもない。

それだからこそ、ステブト博士らの試験管ベビーが公認されているのである（表2）。氏は、すでに十数年前からヒトの体外受精に取り組み、一九六九年には、最初の論文をロンドンで発行されているネーチャー誌に発表している。この時逸早く、わが国のマスコミは「試験管ベビー」なる用語を生んでいる。

一方、インドの試験管ベビーは、カルカッタ大学のスパシユ・ムケルジー博士を中心とした医学者のチームによって成功した。

この方もすでに報じられているが、その内容は、排卵誘発剤を投与した婦人から三日後陰を通して卵巣の卵子を五個取り出し、体外受精して八細胞まで培養したところでマイナス一九六度Cに凍結し、五十一〜三日まで保存した胚を三個移植した結果だという。

これが報じられた時、ヒトでは一度も試みられたことのない卵凍結法が使われたことから、すぐには信用されなかった。何分、凍結保存胚の移植は、近年になって実験動物や家畜で成功しているものの、ヒトでは過去に基礎研究さえ一つもないのだから無理はない。そのうえ、インドの施設ではとうていイギリスのまねは出来ないと、体外受精さえも疑がわれてしまったのである。

後にムケルジー博士が全容をあきらかにしているのを

読んだ範囲では、あながちウソとはいえないが、専門家の多くは疑惑をといっていない。

ムケルジー博士の談話によれば、卵凍結を行なったのは、卵子採取のためにホルモンを投与した母親の生理が狂い、受胎期に合わせるための保存が必要だったといっている。公認されれば、イギリスより一歩進んだ画期的方法といえよう。しかし、ただでさえ安全性が心配されている試験管ベビーに、影響がまだ動物でも十分に検討されていない凍結法を加えるのは尚早のそしりを受けてもやむを得ないようだ。

ステブト博士らも、ムケルジー博士らも一様に学会での口頭発表は行なっているようではあるが、詳細が論文になっていない。技術上の論議はそれをふまえてからでないともむずかしいが、卵胞卵の体外における成熟の問題、体外受精、受精卵培養、移植技術などは動物実験の成果を考えればヒトに応用されてもおかしい時期ではないように思われる。むしろ、こうした手技が卵に対して何らかの影響を与えていた場合にヒトでは取りかえしがつかないことになることこそ問題であろう。ヒトの場合今回が初のケースなので、この点は誰しも予知できないので、慎重論者はその点を危惧して、安全性を充分確かめてから実施することを訴えているにすぎない。

皆さんはどう考えるだろうか。

表2 「試験管ベビー」の歩み

1969. 2. 15 イギリスのエドワーズ, ステプトー博士らがロンドンのNature誌に, 試験管内でヒト卵の体外受精に成功と発表。
1970. 9. 26 イギリスのエドワーズ, ステプトー博士らがNature誌に, ヒト体外受精卵を8または16細胞期まで培養に成功と発表。
1973. 6. 30 オーストラリア, メルボルンのクイーンビクトリア病院のスポークスマンは「オーストラリア医師団が体外受精卵を移植し, 妊娠に成功したが9日で流産」と発表。
1973. 10. 21 イギリスの日刊紙 News of the World は, イタリアのペトリッチ博士が「過去9年来27人の試験管ベビーを誕生させ, 世に送り出した」との爆弾宣言を行なっていたことを報じた。この宣言は1964年グラスゴで開かれた医師の会合で発表されたが, 発表の途中で発言を封じられたという日くつきのもの。
1974. 7. 15 イギリスのリース大学のベビス教授が欧州医学総会の際記者会見し「史上初めて計3名の試験管ベビー誕生に成功しいずれも健康に育っているが, 母親や生まれた場所については医学的見地とプライバシーの理由からあかせない」と発表。
1978. 7. 17 アメリカのニューヨークでシエツルズ博士らが不妊患者に体外受精卵を移植する予定でいたが, 上司の判断で卵が壊されて実現できず, 患者の夫妻が「試験管ベビー第1号を生み損った」と訴訟。
1978. 7. 26 イギリスのステプトー, エドワーズ両博士による試験管ベビー(体外受精児)誕生。信頼できる試験管ベビー第1号として世界中に大反響を呼ぶ。
1978. 10. 6 インドのムケルジー博士らは「体外受精した卵を53日間冷凍保存したのち移植して女の子誕生に10月3日成功」と公表。
1979. 1. 14 イギリスのステプトー, エドワーズ両博士による試験管ベビー第2号(男児)が誕生。

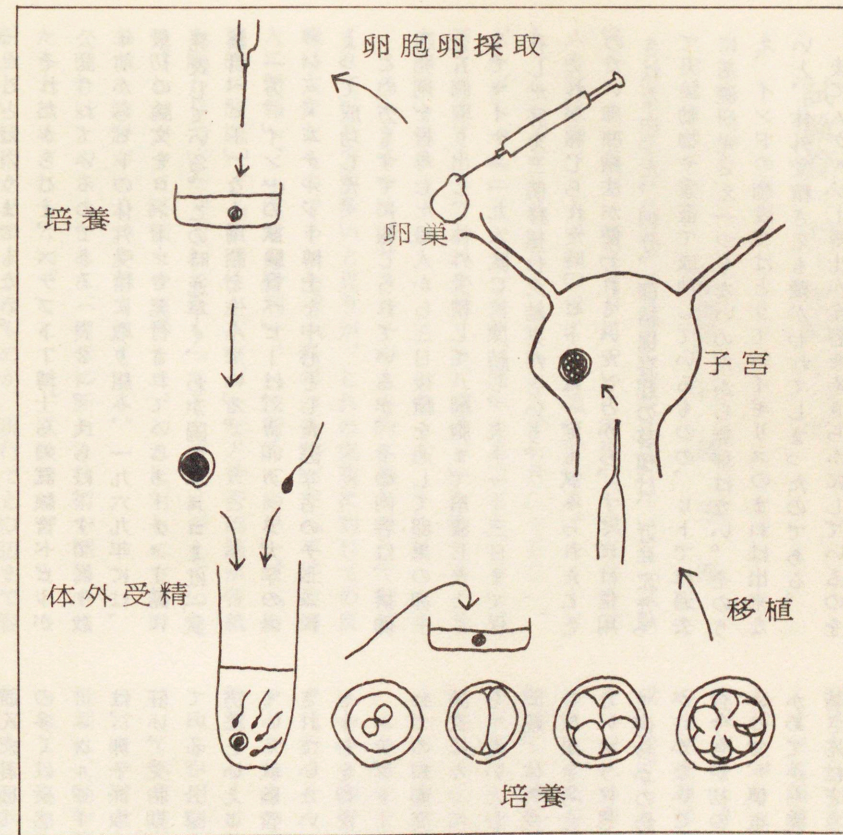


図1 試験管ベビーの術式

表1 関連技術の組合わせによる出産成功例

受精卵移植 → 出産	ウサギ, マウス, ラット, ハムスター, ウシ, ウマ, ヒツジ, ヤギ, ブタ, サル
受精卵培養 — 移植 → 出産	ウサギ, マウス (部分的ヒツジ, ウシ, ラット)
体外受精 — 培養 — 移植 → 出産	ウサギ, マウス, ヒト (イギリス)
受精卵凍結 — 移植 → 出産	ウサギ, マウス, ラット, ウシ, ヒツジ
体外受精 — 培養 — 凍結 — 移植 → 出産	ヒト (インド)

注: ヒト以外の移植は借り腹 (recipient) 利用

日誌についての雑感

畜産部 鈴木伸一

ふつう日記が個人的な毎日のできごとや感想などの記録に対して、日誌は公的性格をもつものである。

日誌については、よく三日坊主の代名詞としても使われるように、なかなか永続きしないようである。しかしなかには永続きさせて、しかも職業上役に立てている人もいるのも事実である。

特に印象に残るのはプロ野球の王選手である。

ホームランの世界新記録を打った時のインタビューで毎日の努力の積み重ねであるといっていたが、そのなかに日記を付けてそれを参考にしている結果であるという事であった。

また小説家の北杜夫氏も「どくとるマンボウ青春記」という小説の中で学生時代に日記を付けていたくだりがある。それは朝起きて顔を洗い、から始まり、品物の値段がいくらであったという事ばかり書いていたのであまり役に立たないというような事を書いていながら実際は

役に立てているようである。

私も日記を付けて二〇数年になるが一向に役立たずである。初期の目的は文字が上手に書けたり、文章も上手になるのではないかと考えたからである。ところがいまだに上達しないのである、それは心がまえの問題と思われる。

しかし現在では習慣になり毎晩日記を書かないと寝付けないのであるが、案外ストレスの解消に役立っているのかも知れない。

閑話休題

家畜を飼養している現場では日常管理していることに對する記録は大切であり、当然の常識である。

ところが実際には、記録の種類や方法が多種多様で実に変な作業の一つと考える。

農業経営において良い成績をあげている人は、やはり各種日誌を付けることに熱心でしかも十分役立っていることである。家族で経営しているところでは奥さんが記録の責任者になっているところが多い。また法人組織のところでは当番が記録するようにしているところが多い。

厚木農場でも各部門で管理日誌を付けているが、我が養豚での問題点を2、3ひろってみると、飼料給与量の付け落しが一番多い。十日毎に体重測定をしているのでそれと同時に飼料要求率を算出する事にしているのでそ

の時に付け落しが発見され大事にっていない。

それから記録当番者が作業終了後直ちに記録すれば良いが、夕食後ののんびり書こうと考えたりすると見落すことができたりする。

またうっかりしてデータを豚に食われたこともある。記録用紙を豚房の柵の上に置いて、ついつい他の作業をやっているスキにやられたのである。前の二つについては管理責任者がチェックするので書き加えられるが、豚にデータを食われた時は目の前が真暗になり、がっかりした記憶がある。

こんな事ばかりを書いていると厚木農場のデータに対する信用が無くなるが、研究のためのものは二重三重に記録するのでまずは安全である。実習用に飼養しているものについては失敗談であります。なおその失敗を無くすためには、初歩的ではあるが責任を持たされたものが確実に責任をはたす事である。

たかが管理日誌を書くことぐらいだれにでもできることではないか。

しかし完全な日誌を書きよい経営、よい研究をする事は本当に大変である。

石垣島の畜産基地

講師 大谷 忠

昨年、この紙面で沖縄県与那国島の農業を若干紹介したが、今秋再度八重山地区の石垣島に渡島する機会を得たので、今回はこの島に建設された日本でも類のない大規模な畜産センター（正式名を沖縄県肉用牛生産供給公社）を紹介しよう。肉牛に興味をもたれる方の参考になれば幸いである。

当地は冬期に訪問した時に比較して、周囲の様子はそれほど変化がなく、白いコンクリートの建物の立ち並ぶ中に、まだ多く残されている赤い屋根ガワラの住宅が点在し、それに当地独特の風化した石垣のそばに赤や紫色のブーゲンビリヤヤ、大きくて真赤なハイビスカスが咲きみだれていた。年々観光化されてきたこの島を拠点として、お隣りの日本一美しいと言われる竹富島、今世紀最大の発見イリオモテヤマネコで有名な西表島、台湾が望見される日本最西端の与那国島等に多くの人達が観光で渡る。

このように観光ムードがいつぱいの石垣市は島の産業発展のために、現在三つの大事業を行っている。それは一、湿地帯の土地改良を目的として宮良川のダム建設を

行い、その近辺の四〇〇haの土地を畑地へと有効に利用しようとする水利事業、二、沖縄県における肉用牛の生産振興を目的とした畜産基地建設事業、三、これから生産されたものを産地直送するための港湾整備事業等である。

筆者はこの三大事業のひとつ、畜産基地建設事業のうち肉用牛生産供給公社（以後公社という）を視察したが、それは大規模で完全省力化された近代設備のセンターであった。この公社は、沖縄の気候風土に適した資質のすぐれた沖縄の銘柄牛を作出し、優良種畜の生産供給を図るとともに、亜熱帯における草地農業を確立することにより沖縄県における肉用牛の生産を目的として始めたものであるという。公社の設立は昭和五十二年十二月一日で、その会員は沖縄県、畜産振興事業団、市町村（三十五、農協（四十三）、県経済連、県信連である。この組織は理事長―専務理事―事務局長（牧場長）―業務課長の立ての系列に、総務係、飼育係、飼料係、改良係があつて、それぞれにスタッフが配置されているが、直接現場で従事するオペレーターは十一名だけである。

経営計画概要は、現況（五十四年七月）は黒毛和種の繁殖成雌牛二〇六頭、育成雌牛一七一頭、採草地五〇ha放牧地七五haであるが、それを最終目標の六十三年三月には子牛から肥育牛まで入れ、計一三〇〇頭にし、草地

所からみると、そのセンターは、牛飼いのシンボルであるタワーサイロがなければ、まさに洋画、ザ・ロングストデイに写し出されたドイツ軍の要塞のように感じられた。

素牛の購買はこの地域の環境に合い、飼い易くそして斉一性のある銘柄牛の作出を目標に、今までに島根県から第四倉花系、晴美系、岡山県は第四下前系、安達系、清国系、奥谷系、広島県は横利系、茂金系などの雌牛を計画的に導入している。またこれらに伴う繁殖は三県より凍結精液（料金は特級六〇〇円、一級四〇〇円）を県畜試を介して譲渡され、交配しているが、公社はその結果から実態を把握しつつ将来の改良方向を検討して、計画交配の基礎を定めようとしている。

沖縄で草地農業は無理だと言う既成概念を打ち破り、国、県、市、および後継者がいる一六戸の農家らが、三六億円（七五%補助）の費用をかけ、自家生産の粗飼料を十分利用した一大肉牛センターの真剣な運営をみて、おそらく、この公社は数年の間でこの地区特有の立派な銘柄牛を作出するだろうし、また、それは日本熱帯農業の発展と向上に大きく貢献するだろうと考える。

紙面の都合により、この程度の概要に終ったが、私はこの公社に関する若干の資料を所持しているので、希望の方にはコピーを提供します。



関係も一三八haにする計画である。施設は計画のすべてが完成されており、畜舎は亜熱帯地方特有の完全開放式で、また大型台風の通過地域であるため、八〇mの強風にも耐えられるよう鉄筋コンクリートで造られている。肥育牛舎は完全流下式で、そのふん尿のかき出しも自動タイマーによるスクレーパーがやっつてのけ、六四二〇m³の大型スラリータンクに貯蔵される。腐熟された汚はいは定置配管されたホースより、各圃場に全自動で散布される。牧草地は暖地型の牧草であるローズグラスが主体に五%程度バンゴグラスが入った混播草地で、一〇アール一〇トンのその収穫草は一二〇トン入りハーベスターサイロ三基に七・八月にかけて詰み込まれる。サイロ利用は通年式で、ボトムアンローダーによる取り出しからファイダーまで完全自動化システムで給餌され、そこに職員の手は一切かかってない。気温三〇度以上の日が続く地域に、サイレージの好気的変敗、いわゆる二次発酵の問題が懸念されたが、私自身が調査したその材料は全く品質の高いものであった。また大型機械による天日乾草調製も盛んに行われ、無窓の鉄筋コンクリート建ての乾草専用納舎に、ボタン一つで開閉する戸扉から、信じられぬほど良質の梱乾草を大型トラックで収納していた。このようにすべての施設が強固に、そして電化され完全省力方式を取り入れている様子を少し離れた場

80年代の畜産の指針

鈴木牧場

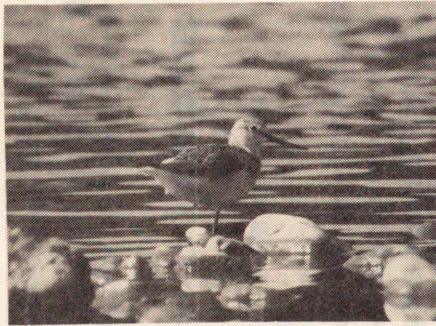
肉牛一筋に生きる者として八〇年代の肉牛の進路に付いてどうあるべきかを私なりに進言してみる事にしました。諸君の小さい幼稚園児の頃の食事はどうであったかを振り返って考えて見て戴き度い、其の頃から日本人の食生活が変り初めたのであると思う。幼稚園での給食が肉を食べパンを取り牛乳を飲んで育って来た事であろう、其の人達が現在では一家の中心となり親の期待を背って八〇年代の総ての指導者の地位に付く頃と思う。諸君の年代から後の年代は総て諸君の食生活に習って生き育って来るであらましよう。年を数えるにつれ米食が肉食に変わり和食洋食の呼名をも変るべき八〇年代に入るのであると思う。今迄の牛肉は脂肪の交雑したサシの入った肉でないと言えなかつた時代ははるか過去の肉と成つたのであると思う。だが全然必要性のなくなった肉ではないと思ひますが。一般大衆の好む肉ではない事は事実になって来た事には間違ひはない。サシ牛は脂

肪が多く毎日食べる事はいくら肉を好む人でも食べられるものではない。忘れた頃に食べる事によりうまさを感じるのであつて、これが毎日では食べられるものではない。其れに比較して筋肉質の多い脂肪の少ない牛肉は毎日食べてもあきることなく、亦多様の調理にも可能であり嗜好性も極めて高く、価格もサシ牛の半値近い価格であり大衆の見地から見ても米に変わる主食と成る事は必至である事と思ひます。さて筋肉質の牛肉を造るには、どうあるべきか。国際的に競争力を付ける牛肉生産でなければならぬのであると思う。要するにコストの低い安い牛肉でなければならぬ、それには在来和牛、単角牛、ホルスタイン種牛丈にこだわって居たのでは大衆の要望には答えられないのではないかと思ひます。此れ等の種類の牛ではどうしても国際的競争には打勝てないのではないか。要するに飼料効率が極めて低いのである。此の種の牛はほとんど濃厚飼料でないと肉牛に育たない。素飼料(牧草類)一五%、濃厚飼料八五%と言われ生産体系では全く事業としては成り立たなくなる。要するに外国の経済に振廻される牛飼は滅亡する事は必至である。八〇年代に向け抜本的に品種の改良と外国種の取入れをする必要性があると思う。素飼料八五%、濃厚飼料一五%に変える牛飼いに成らなければならぬ。日本の国土、風土から言つて不可能と言ひ人が全てであると思ひが利

用法によつて可能であると思う。雑草のむらがる農地も莫大のものであるだろう、此の休眠地の土壌改良し一〇a当り八〇〇〇Kの収穫量を青刈りと一年生の牧草とで、一五〇〇〇Kの収穫に工夫して見る事が大事である。此れ等をエンシレーヂ利用をして牛を飼う事だと思ひ。今の肉牛生産者に聞かせると笑の種にされる事は承知であえて記してみたのであるが、此れが一番大事な基本になると思ひ。

次に牛の改良に付いて具体的に説明してみよう。我が国では明治時代に造られた家畜増殖法により制約されて来たが外国種、アバーデンアンガス種やフェレフォード種、ショートホーン種、水牛種等代表的の牛と国内の和牛(黒毛、褐毛)種、ホルスタイン種の交配により品種改良する必要性は多分にある。いやそれをしてしまうと国際競争に打勝てないであろう。なぜならば日本人独特の体質による嗜好性があるからである。具体的に説明を加えると、フェレフォード種と和牛の一代雑種の場合筋肉、繊維が調和されフェレフォード特有の繊維の荒さがなくなり肉其のものにネバリが出て主飼料を牧草類で育つ特性が生れると思ひ。ホルスタイン種に付いては牛乳生産上みだりに交雑する事は危険であるが搾乳の後継牛を取つた後に素牛を造るべきだと思ひます。現在は和牛を交配する人は大分多く成つて来たが、和牛にかえアバーデンアン

ガス種を交配して取つた素牛は必ず牧草類で肉牛生産が可能である事に間違ひない。此の様な組合せで牧草類をサイレーヂ利用して肉牛生産を考えるべきである。牧草類でも現在の濃厚飼料に変わるカロリーの高い飼料化する事を最高教育の場で研究を重ね成功する事が諸君にかせられた任務と思ひて自覚を新たに努力して八〇年代の日本の畜産の進路の位置付けをしてほしい必ず出来る、在学中に八〇年代の畜産白書の出版を願うものである。要するに八〇年代の牛肉生産は肥育用素牛の改良と地力のある土壌作りによる栄養価、高カロリーを含有する牧草類を以つて、低コストによる牛肉の生産により国際競争力の付く畜産経営でなければならぬと思ひるのであります。此の方法で肥育された牛肉は香りの良い風味で大衆の食卓に何等価格に抵抗なく取入れられ、生産者も安定経営が樹立出来現在の米に変わる主食としての位置付けが不動のものとなり日本の農業の変革期と成るのであるから、諸君は此れからの日本農業の良き指導者となるのであるから、誤りのない進路の指導に当つて下さる事を念願して無限の機待をするものであります。頑張つてほしい。



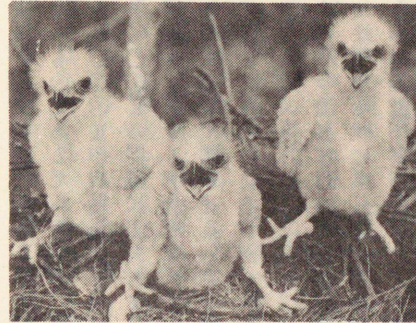
アオアミシギ

スマートな中形のシギで嘴も首も足も長い、日本には旅鳥として多数渡来します。



ツクシガモ

小型のガンを思わせる大型のカモです。白と黒のはっきりした翼をゆっくりはばたいて飛翔し、群でゆるいV字形編隊をつくります。



サシバ

サシバは夏鳥として日本に渡来する、ハシボソガラス大のタカです。ヒナのうちから猛禽の迫力があります。



コジュリン

写真はコジュリン雌の夏羽です。スズメぐらいの大きさのこの鳥は、本邦特産の鳥です。

バードウォッチングブームに寄せて

農大 野鳥の会

人間とはかつてなもので、自然が豊かなときには意識的に自然を求めようとしないうるものです。都市化され自然がなくなるにしようになつたのも、身のまわりから自然が消えてしまった結果ではないでしょうか。現在の自然環境の急激な喪失は、人々の自然への必要性を高め、さまざまなタイプのレクリエーションを生みだしました。その一つにバードウォッチングがあります。双眼鏡ひとつあれば野山で、海辺で、庭先でさえも、だれもが気軽に楽しむことができるのが特徴です。バードウォッチングの楽しさというものは、一度でも味わったら忘れられません。自然の中でこのびのびと飛びまわる鳥たちを眺めることほど興味深いことはないものです。最近は一一般の人の野鳥への関心は高まり、バードウォッチングブームともいうべきブームを巻き起こしていますが、このブームが過ぎ去つた後に真に野鳥のことを考えてくれる人がいつたれほど残るのでしようか。

先日、国の特別天然記念物であるトキを捕獲して人工増殖をするという計画を新聞で読みました。トキ人工増殖に対しては賛否両論ありますが、その是非を問うよりも先に、祖先から受けついできた野生生物を我々が、ここまで追い込んでしまったという現実をもつと真実に考えるべきではないでしょうか。トキの問題にかぎらず、身近なところでおこっている鳥の世界の問題を解決するには、一般の人の関心の高まりというものが必要なことはいまでもありませんが、心から野鳥のことを考えてくれるいわゆる「真の愛鳥家」が必要で、我々、ひとにぎりの愛鳥家だけではどうにもならない問題がたくさんあります。それだけに今のブームが去つた後に、一人でも多くの「真の愛鳥家」が生まれることを願ってやみません。二度とトキのような運命をたどる野鳥をうまいために……。

精神分裂者のひとりごと

瑠 瑠 運

日曜日は、昼近くまでベッドに入って、薄い眠りを続け、お腹がすいたころに起き出す。朝食とも昼食ともわからない食事をとり、好きな音楽を聞きながら、タバコを吹かす。いつのまにか身についた習慣である。それから、レコードをかけながら部屋をかたす。きれいになったら、コーヒーを入れ、サマーベッドに座って、また一服。これもまた、いつのまにか身についた習慣である。

下宿生活を送って、一年と六カ月になる。タバコとお友だちになって五年目になる。精神活動の不安さの中にいたころ、友だちに吸ってみる？と言われたのが切掛で、あとは情性と病付の混乱状態から抜け出せずに、今日まで飽きもせず、タバコと会話を交わす。

何度も何度も止めようと思った。高校の時は、自分を燃やすものがあったから、六カ月とか八カ月位、止めている時があったが、今は、暇の中に踞っている私なので、

手がすぐに、タバコへ伸びてしまう。「暇が人間を造る」

という言葉を、中学の時の担任に聞いたことがある。この年になって、やっとその言葉がわかったような気がした。体に悪いことぐらいわかっている。高校の時、タバコを吸うと記憶力が悪くなると言った時に、ある男の子が、「吸って悪くなると思うなら、いつもの二倍やればいいさ」と言った。確におもしろい、そして的をついている発想だと思った。彼はとてもヘビーだったが、成績は抜群だった。だから、別にタバコを吸おうが、何をしようが、それは本人の自由であり、他人がとやかく言う必要のないものと思う。本人の気持ち次第でいいと思う。女の人にしたりして、吸ってみたいけど、と言う人がずいぶんいるが、吸う勇氣もなく、「吸ってもいいよ。」と言っても、「よすわ。」と返事をする。吸ってみたいければ、吸ってみればいいと思う。これは、タバコに限らず全ての事柄について言えると思う。何事においても、やってみなければわからないはずだ。自分の手で触れてみなければわからないはずだ。女の人は子供を産み、育ててゆく。そういうものの中で、何も知らない母親が、子供に対して何を教えることが出来ると言いのだろうか。——と私は考えている。

ゆっくり歩けばいいんです

走ったりしないで

無理するところんでしまいます

ゆっくり歩けばいいんです

まだまだ時間があります

あせったりしないで

心の中のわだかまり

いつのまにか

私の顔にうつってる

悩み悩んだ心の末に

笑うことさえ

消えてゆく

思い想った胸の内は

たばこのけむり

漂うように

ゆっくり歩けばいいんです

人がどんなになろうとも

自分が自分であればよいのです

ゆっくり歩けばいいんです

ほら あるいてるでしよう

夕やけだって

いつの間にか、十一月の中旬になり、もう私の部屋には、コタツが大きな体を横たえている。気分が乗るというのか、お酒を飲みたい気分になると、ワンカップを二つ買ってきて、部屋の明を蛍光灯だけにして、好きな音楽でひとり、いろんな事を考えながら飲む。私は土曜日の夜が大好きだから、そういうふうにする時は、ほとんども土曜日の夜だが、とても心が落ちつき、疲れが逃げてゆくように感じられる。親許にいれば、私には絶対にできない事である。月曜日から、土曜日まで、朝早くから夜八時位まで外に出っぱなしの私であるから、大好きな夕日を見ることもない。家にいる時は、学校の帰り道、山に落ちる夕日が毎日のように見えたものだった。でも、ここでは見えない。だからよけいに、心を落ちつけ、自分を見つめる時間がほしくなる。

私は完成された人間ではない。心の中は、ボロボロの人間である。ひとりきりになって、自分をもう一度、考え直すことが必ず必要となる。人間は誰しもそうだと

う。自分を見つめ直すこと、もしかしたら、自己満足で終わることがあるかもしれない。しかし、それでもいいと思う。他人に、時に、流され続けていることを少し止めて、ひとりきりになり、泣いたっていい、笑ったっていい、しかしそこに生きている自分を確認して、また生きてゆけばよいと思う。

ひとりでお酒は、私にとっては、涙の洗浄である。人前では、つぶばっている私である。どういふ訳かつぶばってしまう。それは、私が流されたくないという意志から現われることだと思ふ。が、結局のところ、大学という一つの社会にいたら、流されることも必要だということがわかったような気がした。実社会に出れば、もともと流され続け、自分の存在がわからなくなる時はかりだと思ふ。しかし、そういう忙しさの中において、土曜日の夜だけは、自分を見直す時間にしたと思う。

雪に告ぐ

君の白い姿
君の無数の結晶
荒れはてた広野のように
それら全てに虚空を感じる

君は空の造る大気社会に
舞い落ちる……舞い落ちる……
そこには鳥のような
意志はないのか

大きな都会を
白一色に変えてしまふ
君の意志
しかし、それは鳥のような意志ではない
ただ
ただ
大気社会の流れの結果
流れの犠牲

君は夢にまで見た大地に
君は夢にまで見た緑に
歴史的現在を
うえつけるだけなのか
君よ
その白い姿を爰し

自らの求める地へ
降りてみよ

君よ
その無数の結晶から
一個の固体に抜け出し
降りてみよ

君には
その力があるはず
君には
未来的現在があるはず

君よ
夏の雪になつてみるよ
君よ
雪の社会を造つてみるよ

今、クラシックのかかっている喫茶店にいます。今まで一度来たいと思つていたところである。時にはクラシックの音楽に身を浸すのもいいと思ふ。毎日毎日、フオークを聞いているから、よけいに昔の大作曲家の偉大

さを感じる。この原稿を書くために来たといつてもいい。何かが感じられると思つて——ここにいる人たちは、何となく顔つきが違ふようである。

私の兄は、チェロを弾いている。この前、沈み込んでいた時、ラジオでチェロの何とかというのをやっていて、とてもチェロの音が深い味わいのあるものだと思つた。兄のチェロを聞いている時は、本当に耳ざわりな音だと思つていたが、上手なチェリストのを聞くと、とてもすばらしいものに聞える。いつもと違つた場所に、親しい人々から離れ、自分自身を置いてみると、違つた自分が見えるかもしれない。もしかしたら、それは一時の気の迷いというか、偽りかもしれない。しかし、そういうものの中で、精神的に不安定な時代（自分にとっての）に考え悩むことが、これから先、生きていく上で重要な意味を持つような気がする。

やがてくる死に

おまえは私が好きかい？
こんなに落ちぶれた
私が好きかい？
生きている間に、こんなにも
愛されたかったよ

でも
ひとりでも この私を
愛してくれるひとがいた
そう思うだけで 私は
幸せなんだ

過去 二度も おまえを
私は否定してきた

この世の中には

三度目の正直ということばが存在する

今は 自らの心で それを信じる

チェロの音が こんなにも

深く深く 心をおちつけ

悲しい響をするとは

ついと知らなかったよ

おまえにいつ会うか わかりはしない

でも 今度 出会った時には

あたたかく 迎えるつもりだ

おまえは私が好きかい？

生きている間に 人間から

こんなにも 愛されたかったよ

秋の夜の伝説

畜産三年 内山 たま美

独り少女が 星の下で、

若者のために流す涙は、

この世で一番きれいな涙。

名も知らぬ土地で、

少女の名を呼びながら、

若者はある夜 星になった。

なぜ 僕達は戦うのだ、

罪もない人達を殺す事は、

僕にはできない と言ひ残し、

若者は 剣を持ち、

戦場へと 向かって行った。

毎晩毎晩 星の輝く限り、

少女は 若者の事を思いながら、

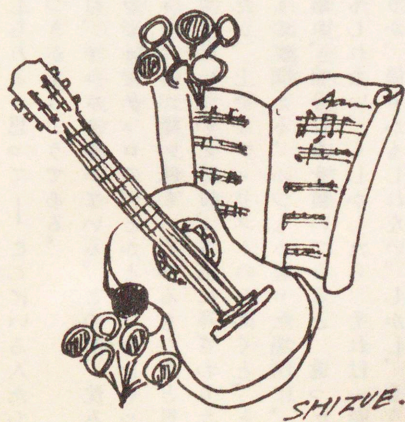
空を見上げ 涙を流した。

肩に流れる その黒髪は、

月の光に照らされて、

淋しさ色に 沈んでゆく。

この詩は、ラジオでやっていたチェロの演奏を聞いた
時に、ふと、頭に浮かんで来たものである。私が言いた
いことは、前にも述べた通り、いつもとは違う世界に自
分を置けば、違った何かが見えるということである。こ
の場合には、私は「死」というものが見えた。人間が生
きていく以上、常につきまといっている「死」というもの
に對し、ただ、そういうふうにしかならなかつたという
ことではあるが、「死」というものを意識してこそ、生
きる価値が認識できるような気がしたからである。



少女の瞳は、
一時も 星から離れる事もなく、
跪いた白い脚も、
少しも揺れる事はない。

やがて 四つの季節が過ぎ、

再び秋が訪れた。

そして あの日と同じ晩、

少女は 動かぬ石となり、

いつまでも いつまでも、

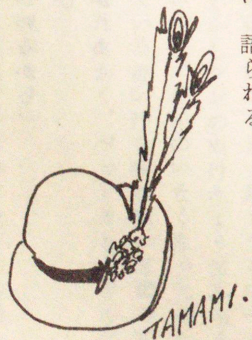
星を仰ぐ 淋しさ色の石となった。

そしていつしか その石に、

流れ星が 降りたという、

秋の夜の伝説が、

その村に 語られる。



「むなしさ」が
こみあげたとき

畜産一年 吉 田 敏 男

悲しい人
あなたの言葉で
どんなに人が傷つくか
考えたことがあるか

寂しい人
あなたには
どんなに人が苦しんでいるか
わかっているか

すばらしい友よ
おまえは僕の宝物
どんなに少なくても
世界でたった一つでも
百万人の悲しい人より
一億人の寂しい人より
おまえが一人いれば

おまえは僕の心
おまえがいるから
僕は再び
立ち上げれる

夢

畜産一年 中 原 完

眠りを覚ます朝陽のように
心を照らした
今までにないものが
僕の中で芽ばえ
すくすくと育ちはじめる
あなたと一緒に同じ景色を見れたら
こんなすばらしいことはない

夢にまどろみ
目覚めたくない
ふと、そんな気がして
少年のように純粹に愛を感じ始める
愛する人と一緒に同じ景色を見れたら
こんな幸福なことはない

かんらばやし

畜産一年 三番目の明子

— 赤い竜の昔話 —

閑羅囃子の花は、荒れ地に咲く。火を吹く山のすそ野
にあって、白い白い花を咲かす。

荒れ地も秋は実り、閑羅囃子も小さな実を結ぶ。白い
花にましてもあでやかな、赤い赤い小さな玉である。

モヨが谷ひとつ隔てた村の農かじへ嫁いだのは、ちよ
うど十五の冬だった。ころねのやさしさとときりよりの
良さを気に入られての嫁入りで、モヨはよく働き、村の
お母ん連中に可愛いがられた。村にもなれて半年過ち、
夏も終えようというころ、来年の春には、自分もお母ん
になることに気がついた。季節はちよとど実りの時期、
しかしその年、村は天地のひからびたような凶作に見舞
われた。

閑羅囃子にも、よく実る年とよく実らぬ年がある。田
畑が実らぬ年に限り、閑羅囃子はよく実った。

*

村はさして豊かではない。モヨは村に来て一年ちかく
になってそれに気がついた。俗に言う、物もちな村だか
らそれに気づくのがおくれたのか、凶作になると、ふつ
りと米がナベから消えた。
しかし、モヨには食の糧よりも気にかかることがあつ
た。この村には変な慣習があるようで、村の夜長、月明
りの中、嫁ゴやお母んが人目を忍んで戸外に出る。うつ
むきかげんで枯れ野に分け入り、何やら摘み取ってナベ
で煮つめ、赤黒い煮汁を作る。何に使うのか、なぜに人
目を忍ぶのか、モヨは村の衆に聞くに聞きにくく、日を
過ごしていた。
だが、霜月十三夜の晩、その意味を知る夜が来た。モ
ヨは二つとなりの家の嫁ゴのハルが黒い鉄ナベを下げて
家を出るのを偶然見してしまう。ハルが人目を忍んで夜道
を行く。悪いこととは思いつつも、その姿を物陰から追
った。ハルは村辺の田あぜに、鉄ナベの中みをぶちまけ
そそくさと、しかしシンのぬけたようにふらふらと自分
の家に帰っていった。ハルのいなくなつたあと、モヨは
田あぜに残っている赤い汁を手にとって腰をぬかした、
それはまだ生あたたかく、べっとりよとどんだ血だった
のである。

「モヨ、知ったがや。」
モヨはどきりとした。目の前には村のお母ん連衆がい

た。ただただおびえているモヨに、村の一番の年かさのお母んが低い声でゆっくりと話し出した。

「赤子、腹子、乳呑み児、今年の作では養えん。閑羅囃子の赤い実は、煮つめて呑むと子が墮る。ハルが今さつきすてたのはその腹子じゃ。モヨ、お前は三月で身も軽い。今呑めばその分、楽に墮る。もう分かったか。長い長い昔からこの村はそうしてながらえてきた。」

モヨは急に押えつけられた。

「村のお母ん、おらはそんなことはいやだッ。」
そう叫んだとき、つんのめって田あぜに手をつっこんだ。思わず手をぬきあげたモヨは月明りの中、手指にからみついた肉片を見て、ふりしぼるような叫び声をあげる。その口をふさいだのは、ようしやなく流し込まれた煮汁だった。

*

次の朝、モヨの姿は沼に消えた。しかし全体が生き残るために、ひとりひとりには残忍なおきてでも、限られた地の中では許すしかない世だった。この村で血を流したのは、お母ん衆も同じだったのである。

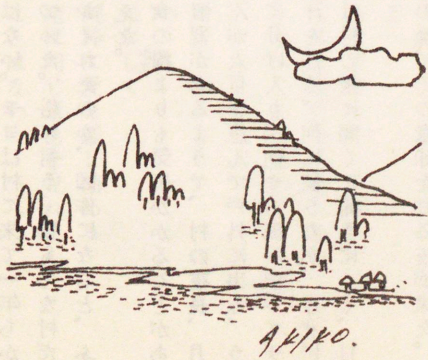
雷が鳴り響いたのはその時。ザーザーと降る雨が十日十晩を降りしきった。土砂はすそ野を洗い、以後、閑羅囃子は村に生えることはなくなった。

七日目の雨では、村の半分が流され、事のつてを知つ

た村人は、水を司る竜神の社を立て、今まで降りむられた闇児とモヨ母子を祭り、それによってようやく雨が止んだのが十一日目の朝だったのである。
社には毎年祭りがもうけられ、霜月十三日の縁日に鳴らされる囃子は、いつの世からか、「かんらばやし」と呼ばれるようになったという。

*

北の原に咲く花がある。名を問えば、たあいなないその草が昔、そんな悲しい物語りをもって、そのまま流されてきたことを知っている者は誰もなく、秋は静かに実を放ち、冬にたえて春をまつのである。



スガレ追い

二年 小 椋 勇 人

中央アルプスの秋は早い。夏の間、登山者の目を楽しませてくれた高山植物も今は来年の春に備え新しい実を結んでいる。日を追うごとに山の木々たちは、思い思いの衣裳をまとい、やがて訪れる長く厳しい冬に備え色とりどりの葉で足もとを暖めている。

その頃麓では、秋の収穫を終えた男たちが夜明けを待ちかねたように天竜川へと魚（アカウオ）を釣りに出かける。昔、海産物をほとんど口にしなかつたという山国の人たちは、動物性蛋白質の補充を川魚やスガレの子（蜂の子）に求めたという。ここでいうスガレとは肉食の蜂で、その毒は蜜蜂よりも強いという。地方では地蜂と呼ばれ山間の土手に五十二段の巣を作るものである。このスガレ追いを経験したのは私の幼い頃である。スガレ追いの準備として先ず、スガレの餌となる川魚を捕え、次いで仕掛を作り煙硝を作る。

明日はスガレ追いだという晩、私とおやじは、まるで速足にでも行くかの如く弁当、水筒、お菓子などを用意し胸を弾ませていた。

翌朝、打ち合せどおり男たちが集まった。弾む気を押えられないようにわれ先へと林の中に進んで行った。林を通り過ぎると例年スガレの居そうな場所に餌を仕掛ける仕掛けてからまもなく働き蜂がやってきた。「よし、うまいぞ。」スガレは運べるだけの餌を抱え、まさに飛び立とうという瞬間、予め用意した仕掛けを餌とすり替え、スガレに抱かせて飛ばせるのである。この仕掛けとは、綿に魚肉をつけただけの簡単なものであるが、綿の大ききさ肉の量などが大変重要となる。

スガレは抜けるような青空の中へと飛んで行く。これからだ。スガレの抱えた白い綿を目印しに人間と蜂との戦いが始まる。相手は蜂である。所かまわず飛んで行く。一方、逃してはなるものかと男たちが追い始める。足をすりむき野バラに服を引掛け、泥だらけとなって。それはまるで珍らしいトンボを見つけた子供の姿のようであった。

「見つけたぞ」一人が叫ぶと皆その声に集まる。林の中、日だまりの土手に小さな穴がひとつ。次から次へと蜂たちが餌を運び、そして飛んで行く。一人が言う「これは、大物だ。」男たちの顔は綻びる。

さて最後、手製の煙硝に点火し入口に入れる。蜂はその煙りで気を失う。そのすきに男たちは素早く巣を掘り出す。さされては大変である。なにせ毒は強い。「壊す

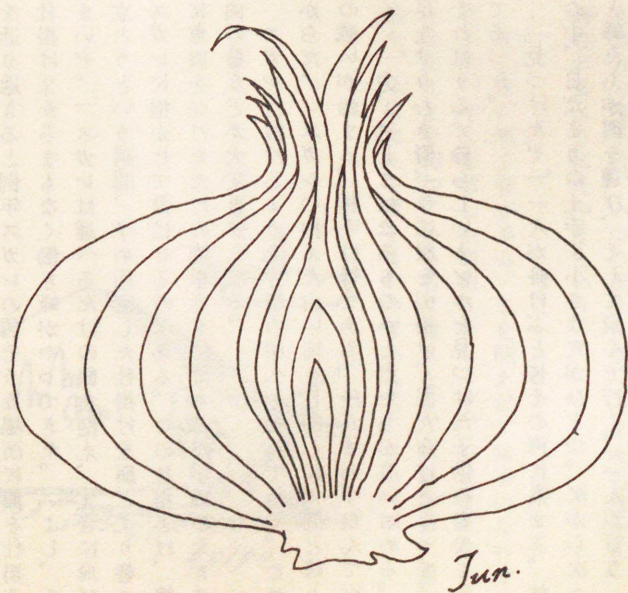
な」「ゆっくりやれ」真剣な言葉の中、
「これは大きい、十段はある。」

その一声でどっと歓声が沸き立つ。それは見事なものであった。直径二十五センチ以上もあるかと思われる菓が重なり合い十段以上はある。

目的を果たすと近くの川まで行き、蜂の子を酒のつまみとし、持ち合った酒を傾むけ、酒盛りが始まる。

「蜂の子」酒飲みには最高のつまみらしい、今は、松茸の半値以上はするという。

私も今は多少の酒を口に作る。秋の夜ながおやじと二人、盃を傾ける時、今でもあのスガレ追いの日のことを懐しむ今日この頃である。



特集 2

「私の生きがら」

キッチンニンモト
西 本 治 子

早いもので私が農大一高の前に定食屋「キッチンニンモト」を開店してから三年半になりました。最初は、高校生のお客さんが多いかな、と思っておりましたが、開店の時から農大の学生さんが多く、今では、お客さんの八割を占めています。雨の日も風の日もお出かけ下さる先生方、学生さんに、紙面をお借りして心からお礼申し上げます。こうして毎日、学生さんを相手に商売しておりますと、四季折々楽しいこと、淋しいこと、うれしいこと、心配なこと等がいろいろあつて、一年の経つのが早く感じます。例えば、今頃は、就職のことで飛びまわっている学生さんを見ると、毎日毎日心配です。でも心配するだけで何もしてあげられないもどかしさを感じながら、早く決つてくれれば良いなと心で祈っているだけです。昨年の今頃も、一昨年の今頃もそうでした。けれども、こうして心配していた人が、一年経つと見違えるばかりに立派な社会人になつて訪ねて来てくれるのです。

毎年の「収穫祭」の日、それは私にとつても待ちに待った日です。卒業された方が、どんなに立派になられたか、最近は何にいても待ちきれずに、いそいそと大学まで出かけるのを、昔の恋人に会いに行きみたいだと娘にひやかされます。三月、卒業の頃は淋しさで一杯です。それぞれに行く先が決まり、希望に燃えて社会に出て行かれる学生さんに、淋しい言葉は禁物ですが、本当に我が子供を旅立たせようという気持ちになります。子供たちは年々、大きな仕事をし、大きな人間になつて行くことでしょう。私は、それを楽しみにこの先、年は老いても、店を変らず、出来るだけサービスタバの値段も変えずに、学生さんに腹一杯おいしい定食を食べて頂くことを生きがいに頑張ります。どうか、こんなおばあちゃんですが、おなかの空いている時でも空いていない時でも、何時でも遊びに来て下さい。尚この三年間、卒業される方の想いの寄せ書きを頂いております。大事に大事にいたしますので今年もどうぞお願いいたします。



「涙・なみだ・泪」

― 第八十七回収穫祭 ―

ライオンズ賞

前夜祭「がんばれ「タブチ」」
脚 本 いしいがんばれ「タブチ」より

構成 小椋 勇 人 二年

キャスト

倉橋 正己 一年
清野 緑 二年
八重樫 哲 一年
宮入 淳 一年
ひろおか

優勝

美人コンテスト「銀色の車」

構成 加藤 新 悦 二年

演出 清野 緑 二年

キャスト

宮入 淳 一年
橋本 彰 二年
長井 邦 人 二年
加藤 新 悦 二年
銀色の車

第三位

野外劇 「嫁ききん」

脚本 加藤 新 悦 二年

構成 小椋 勇 人 二年

演出 加藤 新 悦 二年

衣装 佐藤 朱 実 二年

ナレーション 橋本 彰 人 二年

キャスト
清野 緑 二年
柳井 司 二年
川野 宏 二年
本川 彰 二年
藤本 誠 二年
小吉 勇 敏 二年
一 豚 郎 二年

北門アーチ

設計者 橋本 彰 人 二年

製作 吉柳 田 敏 篤 男 司 一年

体育祭
バックボード

設計者 萩野 朋 美 二年

製作 宮倉 入 橋 正 淳 己 一年

第八十七回収穫祭におきまして
上記の成績を納めました

十月六日畜産学科収穫祭本部開きを始めとし、十一月五日の体育祭に及ぶ一ヶ月間、私達畜産学科収穫祭本部役員一同精一杯やってきました。その中において宣伝バレーは、一年から四年を通じ、三十有余名の参加をいただき、成功のもとに終わりました。しかし、経堂バレーにおいては、バレーの先日に台風にみまわれ、みこしの大半が崩壊し、一時は、参加を断念せざるをえない所においやられました。私達は天をおおき台風をうらみしました。しかし、何もしないではいられません、役員一同は、明日の経堂バレーに間に合わせ様と、停電の中、徹夜作業までして、やつとのことでみこしを復活させました。私達役員の熱意がみんなにときき、当日は、前代に例を見ないほどの盛況ぶりでした。

前夜祭：小椋勇人（二年）を筆頭とする前夜祭役員の活躍により、難かしいと思われた、漫画「がんばれ「タブチ」」のギャグを独自のアレンジにより、すばらしいものに仕上げライオンズ賞という賞をいただくこととなりました。美人コンテスト：優勝という一声が本部にとどいた時、女が泣き、男が泣き、先輩が泣き、涙、なみだ、泪、一人一人いろいろななみだだったことでしょう。この銀色

の車をやろうと考えたのは、昨年の収穫祭が終つてすぐ、ふとしたレコードを聞いて、それじゃこれをやろうと、言つたのが始まりでした。

一年がかりで仕上げたミュージカル銀色の車、スタッフ一同、踊りの練習を毎日くり返し練習致しました。本番当日、私達は優勝などは意識せず、今まで練習した成果を充分に出そう、それで結果がどうであれ、心には一杯やつた思いが残るじゃないか、とみんな思いこみ、発表の際、優勝畜産学科銀色の車、この一言がスタッフ一同にどの様に感じ取られたか、それは、みな違うことでしょう、しかし、私達の心にはすばらしいものが残りました。

野外劇：一日に行なわれた、美人コンテストにまけない様に頑張ろうと一日の夜から、三日の当日にかけてあいている時間すべては、野外劇の為に使つたと言つても過言ではありませんでした。他学科では、きらびやかな感じのものやテレビドラマ様、マンガギャグ風と言つたものに比べて、我畜産学科では、農業問題特に畜産業界の問題を取り上げました。この姿勢は、ここ数年間続いています。

嫁ききんという農家の問題でも大きなウエイトを示していると思います。この嫁問題をテーマとし、農業の本当の意義とは何かそれを表わそうとしました。三位という賞をもらうことが出来たのはスタッフの努力の結果だと思えます。俺達だつてやれば出来るんだ、

DRAWING



何もしないであーだ、こーだと言っているよりは、まずはやってみようじゃないか、それでだめだったら又一から始め直そうじゃないか、そんな気持ちでやって来た野外劇、これは私達に大きな自信と、友を与えて下さった様に今、私は感じております。

北門：農大の正門を装るのが造園学科であれば北門は我畜産学科である。正門はたる木を組み合わせていく、つみ木の様なものであるのに対し、北門は、かざられたスペースをいかに有効に使い、きれいに見せるか、かつ、畜産の主旨を伝え、農大らしさを引き出さなければならぬ。つまり、北門は、農大をぎょう縮したものでなければならぬ。そういつたことからして、北門はスペース芸術と言つて過言ではない。バックののどかな酪農風景に張りこの牛四頭がかわいらしく、牧歌的ムードには、幼ない子供もふと立ち止まる。そんなじょうけいを夢見た製作者一同は、収穫祭当日「お母さん牛よ」この言葉を聞いた時、胸にこみ上げるものがありました。

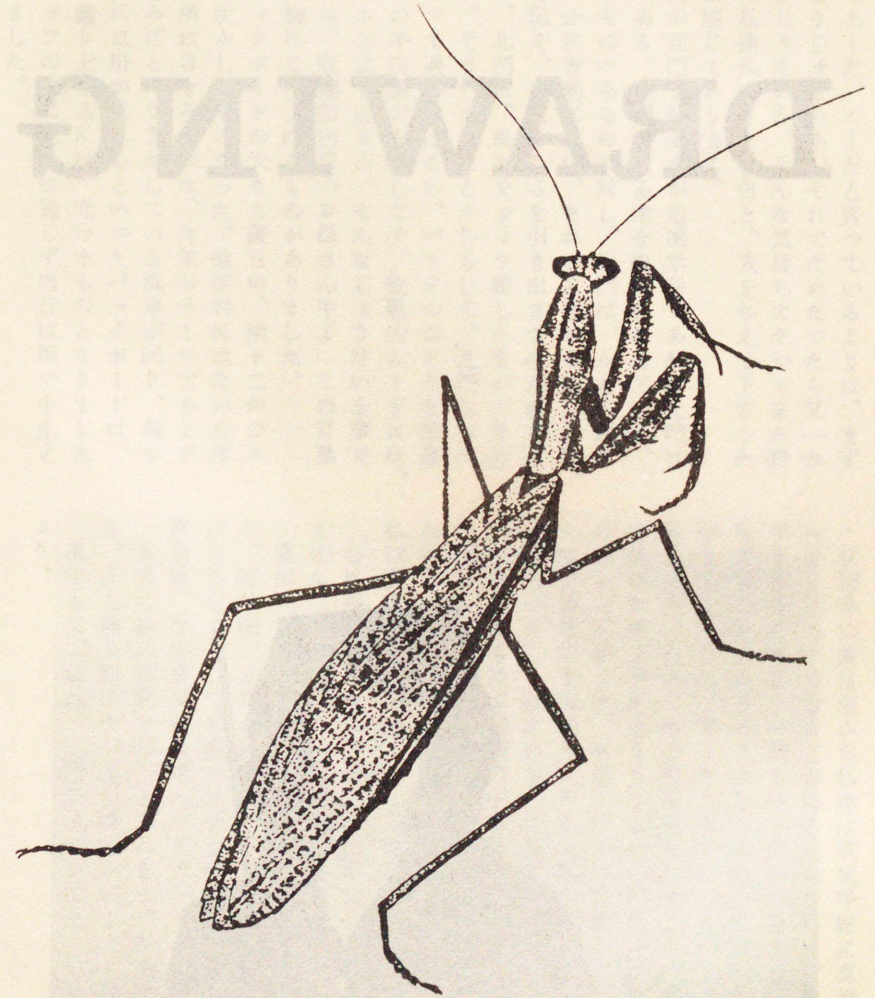
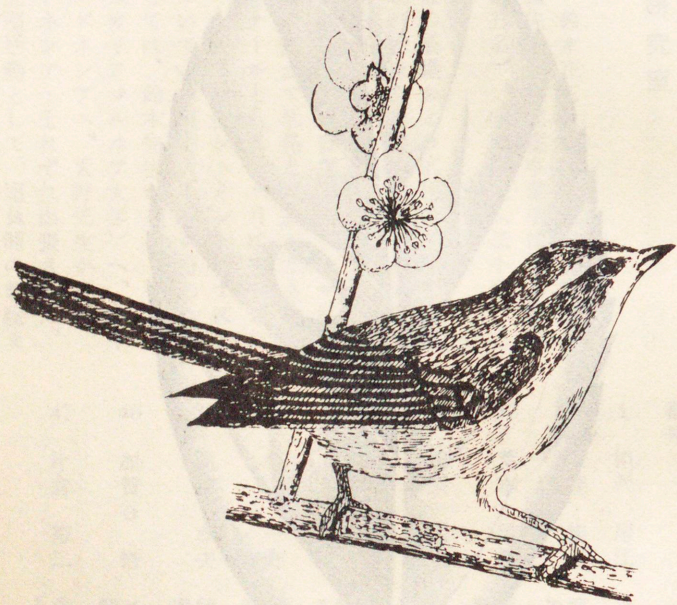
体育祭：バックボードの大きさ縦5m、横12mのスペースを充分生かしたものだ。他学科にはない立体的に仕上げた所は目をみはった、今年のテーマであるドンキホーテをみごとに引き出している風車が回り、馬が踊る、バックには川が流れるといったバックボードは、体育祭応援を盛り上げるには、充分なものとなりましたが、そのスタッフの声は天には通じず当日は雨で中止となつてしまいました。

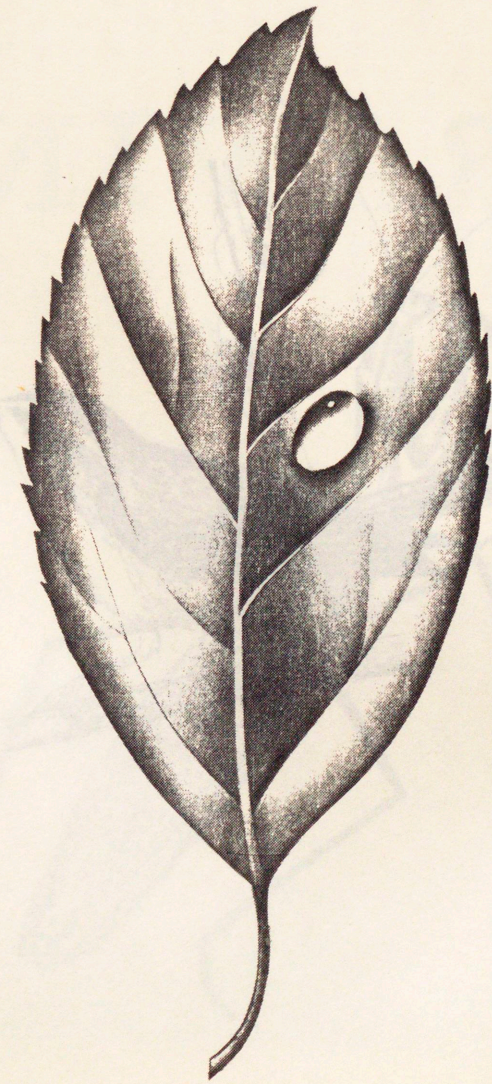
収穫祭の数日前から私達は天気予報に真剣な耳を傾け、作業をしていて雨などが降るものならば、てるてるぼうずを作るなどして一刻も早くやむのをまつたのもでした。体育祭の先日から降り出した雨の中に立って空を見上げ、早くやんでくれ、早くやんでくれ、その中でも私達は最後の仕上げへと、雨の中作業をしました。当日になっても雨はやまず中止となりましたが、私達の思いはつるばかりで、雨の中、有志だけの体育祭となりました。みんなで体育祭を成功させたかった。私達は雨をこの時ほどうれしかったことはいずれもありません。

一ヶ月にも及ぶ準備の中で私達は何を思つただろうか、たしかにつらいことが多かった毎日でした。みんなつらい思いをして一ヶ月間やって来た、残つたものは何か、私は満足感、充実感、これでいっばいでした。心に残るものをやつたことに対して不満なことはありません。

宣伝ストーム、経堂パレード、前夜祭、美人コンテスト、野外劇、北門、体育祭のバックボード、すべてにおいて力をつくして頑張つてやって来た、私達の心の中は満足感、充実感でいっぱいです。

本当に良い経験をしたと思います。友を知り、友と泣き、友と語り明かす、友と酒をかわす。来年も又、私は、収穫祭でバカになつてやることでしょう。





研究室だより

昭和五十四年度
卒業論文題目
畜産学
畜産学
畜産学
畜産学

家畜育種学研究室

家畜育種学研究室は、鈴木正三教授を室長に、田中一栄教授、天野卓講師の諸先生と研究室卒業生による特別室員ならびに大学院生（五名）、学部学生（三十名）とから構成されている。

研究室では、家畜育種の基礎および応用の学問を広範囲にわたり研究しているが、特に血清学、分子遺伝学ならびに細胞遺伝学に関する研究が行われている。

さらに毎週の活動として、学生の自主的なテーマについてのゼミナールおよび談話会で活発な討論がなされている。本年は、特別ゼミナールとして、十月に来日された、西ドイツのミュンヘン大学教授シュミット博士による「白血病と抗病性について」のゼミナールが行われた。さらに海外研究活動としては、鈴木先生がタイ、インドネシアおよびアメリカ（カリフォルニア大学）へ、田中先生が韓国、およびインドネシアへ、天野先生がタイ、マレーシアおよびインドネシアへそれぞれ出張された。また、五十四年度の研究室活動として、室員間の親睦を一層計るため、ボーリング大会、秋の研修旅行（群馬サ

ファミリー・裏妙義一泊二日）、コンバ等を行なった。なお、年一回の定期総会ならびに室報の発行は、特別室員との交流においても重要な活動のひとつである。

学籍番号	氏名	論文題目	指導教員
1	相沢 房江	日本産イノシシの形態学的研究	田中
8	安達 佳子	液状全卵の酵素活性低下による加熱程度の判定法に関する研究	鈴木山中
13	荒木 信枝	東亜における山羊に関する研究動態について	鈴木
18	石栗 基志	牛の異性双子における血球キメラ現象について	田中
24	今井 浩	黒毛和種の血液型に関する研究、特に美方牛および見島牛における血液蛋白の多型	天野
29	榎本 一弥	綿羊の血液蛋白の遺伝的変異に関する研究	田中
37	岡崎 孝夫	綿羊の唾液中における蛋白・酵素の電気泳動的変異	田中
46	加賀谷 悟	ヤギ P H I deficiency に関する研究	天野
47	片倉 裕二	東アジア系水牛の体型に関する統計学的研究	天野

家畜衛生学研究室

本研究室は、近江弘明助教授、渡辺忠男講師、後藤克己副手各先生の御指導のもとに、四年生二十二名、三年生三十二名、二年生三名、室員一同が一体となつて活発なる研究活動を行つてゐる。

研究活動としては、室員各自希望する家畜、家禽別に分け、牛班、豚班、鶏班、実験動物班の四班に分かれ各家畜、家禽の疾病に対する予防法及び、糞尿処理など家畜衛生（家畜、家禽の生命を脅かす種々の健康阻害因子を除去し、家畜、家禽の生命の延長をはかり、かつ生産を向上せしめることが、主な目的である。）の立場から独自に追求してゐる。

また、両先生が兼務しておられる本学家畜診療所においても、一般外来動物の診療を中心とした各種の研究活動が行なわれてゐる。

その他研究室の活動内容は、年間行事として新入室員歓迎会、野球大会、収穫祭参加（文化展、模擬店）、親睦旅行、送別会、定例会、セミナーなどがある。

本研究室の大きな特色として、その研究内容は、言うまでもなく、室員各自が室員としての自覚と責任を持ち、一人一人がその運営に、大きく貢献してゐることである。このような、多面活動において学生生活の充実を計り、室員各自の個性を引き出し、その個性を持ちより、研究室独自の個性を創造するという事に我々は、目標を置いてゐる。

56	北原 教裕	豚の白血球に関する研究、特にLD抗原の分類と遺伝	田中
63	黒川 宏平	豚赤血球酵素の遺伝的変異に関する研究	田中
66	小泉 昌敏	ウシの新血球抗原の分類とその遺伝	天野
83	桜井 悦夫	豚リンパ球の保存に関する研究	田中
85	佐々木洋夫	家兎と野兎の頭骨計測による比較研究	田中
89	塩川 好美	血液蛋白変異を指標とした東アジア系水牛とインド系乳用水牛との遺伝的差異	天野
96	所賀 雄大	乳牛の起立不能症について	
108	曾根 弘一	牛亜科(Bovine)の細胞遺伝学的研究	田中
113	高橋 勉	血液型を指標として日本短角種の遺伝子構成に関する研究	天野
117	田中 裕	血液蛋白変異を指標としたインドネシア在来牛の遺伝子構成	天野
118	田中 房子	実験動物の乳頭数に関する研究	田中
121	玉木 裕二	ハムスター類における染色体に関する研究	柴田
199	安村 明美	乳牛における搾乳方法と泌乳量との関係	鈴木
247	西野 芳明	インドおよびビルマ水牛の品種に関する育種学的考察	天野

てゐる。
十二月には、新役員も発足し室員はますますはりきつてゐる。

12	天野 正昭	飼育管理下におけるアミメキリンの生態に関する研究、特に反芻行動について	近江(渡辺)
19	石田 一博	愛玩動物における衛生対策の実態調査	近江(渡辺)
31	大内 一志	小動物におけるX-Rayの造影法について	近江(渡辺)
32	大川原千秋	日本産乳哺乳動物の固定について(特に被毛からの識別)	湯浅
34	大崎 安夫	東京都町田市における養鶏の衛生対策について	近江(渡辺)
35	太田 克	房総半島のニホンザル高岩山第一(Takagoi)群の遊動に関する調査研究	近江(渡辺)
38	小川 正則	野外における豚消化管内寄生虫の寄生状況について	近江(鈴木)
49	上遠野 宏	犬系状虫寄生犬に対するFILARARIAMIDEの駆除効果について	近江(渡辺)

51	兼台 靖弘	実験的腎不全犬の一般臨床所見並びに血液性状について	近江(渡辺)
52	桃沢 勝典	豚体各部位被毛の形態的観察について	近江(鈴木)
68	甲田 登	神奈川県平塚市近郊における畜産の衛生対策について	近江(渡辺)
69	小杉 博之	都市近郊における養豚の糞尿処理について	近江(鈴木)
73	小布施俊二	ニワトリヌカカの消長が鶏の血液性状に及ぼす影響について	近江(渡辺)
77	小室 正二	超音波におけるラットの生体変化	湯浅
84	佐々木直孝	馬蛇の生態に関する研究(特に産卵について)	近江(渡辺)
93	下島 健一	千葉県館山市近郊における酪農の糞尿処理について	近江(萩原)
95	下山 達矢	群馬県東部地域における酪農の衛生対策について	近江(萩原)
98	鈴鹿 茂美	コガネ虫類の卵殻の構造に関する研究	後閑

234	倉辺 雅光	素有機磷剤の駆除効果について	近江(忠)
230	栗山 雅雄	千葉県東葛飾郡における酪農の衛生対策について	近江
227	衣川 利章	アルコール不安定乳分泌牛の血液性状について	近江
226	赤岡二己夫	アメリカ・カンサス州における養豚農家の衛生対策について	近江(鈴木伸)
224	清田 勇	肝蛭の発育環に関する研究中間宿主について	近江(忠)
219	佐藤 洋子	豚ジラミの駆除に関する研究抗成虫剤について	近江(鈴木伸)
210	渡辺 護	実験動物の血圧に関する研究超音波血圧計の応用	近江(忠)
209	吉川 仁也	砒素剤投与犬の血中遊離アミノ酸の変化について	近江(杉村)
208	吉川 隆志	家兎の耳疥癬に対する低毒素有機磷剤の駆除効果について	近江(忠)
206	横田 一郎	静岡県遠州地域における養豚の衛生対策について	近江(鈴木伸)

161	原 恒春	実験動物の麻醉に関する研究特に全身麻醉について	近江(忠)
156	服部 信昭	乳牛の妊娠時における尿性状について	近江(萩原)
146	新田 光一	犬舎内飛来衛生害虫に対する防虫ランプの忌避効果について	近江(忠)
137	中田 利隆	豚ジラミの駆除に関する研究、殺卵剤について	近江(忠)
135	中川 和弘	暗室内飼育下における妊娠家兎の血液性状について	近江(忠)
132	内藤 聡	爬虫類の生態に関する研究、特にユウダ類の相対成長及び野外食性について	近江(湯浅)
124	津田 孝男	養鶏場に飛来する野鳥の鶏病抗体の保有状況について	近江(忠)
120	田畑 泰作	茨城県小川町における養鶏の糞尿処理について	近江(忠)
107	芹沢 修一	豚の発情前後における血液性状について	近江(鈴木伸)
101	鈴木久美子	養鶏場に飛来する野鳥の外部及び内部寄生虫の寄生状況について	近江(忠)

245	山中 祐輔	家畜の糞尿処理に関する研究土壌菌の応用	近江(忠)
255	座間 勝基	野外における豚トキソプラズマの抗体調査	近江(鈴木伸)
212	久保山 浩	消化管内寄生虫卵投与犬の一般臨床所見並びに血液性状について	近江

畜産経営学研究室

当研究所は、吉村教授をはじめ、桜井講師、石岡助手の各先生と、学生室員四年生十七名、三年生九名により構成しております。

当研究室の主たる研究は、各種技術の経済学的見地からの、有機的結合あるいは代替などであり、現状把握が絶対的に必要になる。その為、各地域の調査が多くなる。しかし、最終的な目標はあくまで、ゴーイング・コンサーンとしての畜産経営であるべきで、現在の研究室の姿は、必ずしも最高とは言えないが、少しでも、そこに近づく為に日々努力しております。

現在、研究効率を高める意味も含めて、酪農、肉牛、養鶏、養豚の四班に分け、それぞれ本人の意志により、希望する班で活動しています。班活動の主なもの、ゼ

162	原 昇	鳩の消化管内寄生虫に対する駆除法の検討	近江(忠)
165	平井 優	路上における排泄犬糞の内部寄生虫について	近江(忠)
170	福島 康人	犬消化管内寄生虫の駆除に関する研究、注腸法について	近江(忠)
172	藤井 仁夫	消化管内寄生虫卵の保存に関する研究	近江(忠)
179	岡 強	実験的腎不全家兎の一般臨床所見並びに血液性状について	近江(忠)
187	南 俊一	自然動物公園における草食獣の衛生対策について	近江(忠)
189	武藤 勝	豚の発情鑑定に関する研究 Walsmeta の応用	近江(鈴木伸)
190	村田 文武	北海道静内地域における馬の衛生対策について	近江(忠)
195	森口 一	神奈川県荏田におけるユウダ類の行動調査	近江(忠)

ミになりませんが、自分の所属する班以外のゼミに参加する事もでき、幅広い知識を得られる様になっております。当研究室が、畜産学以外の研究室と大きく異なる点は、畜産という自然科学の側面の強い分野にありながら、経済学という社会科学の分野をその根底に有する点にあり、故に自ら畜産に関する知識は言うに及ばず、経済学、経営、簿記、それに時として税法等の深い知識が必要になってきますが、それらの基礎的な知識の不足は如何ともしがたい現状にあります。

以上の様な研究の他に、いろいろな行事等もありますが、各自の人權をあくまで尊重した活動を行なっております。

30	遠藤 祐司	新潟県下の乳牛飼養における粗飼料の生産性について	吉村
41	小倉 泰	大家畜公害における糞尿処理について	吉村
74	小堀 賢一	茨城県城北地区における和牛の飼養に関する経営的研究	吉村
114	巽 常義	北陸における養豚の経営設計について	吉村
116	田中 弘毅	里山利用促進事業の酪農経営に関する研究	吉村
122	塚越 弘道	大規模養豚一貫経営の時系列的経営分析	近江吉村

134	中 良子	北海道日高地方における軽種馬牧場の衛生対策について	吉村
164	兵頭 勉	茨城県における酪農経営の現状と展望	吉村
168	平石 芳文	茨城県における繁殖豚の経営設計について	吉村
186	松本 則子	北海道日高地区における軽種馬牧場の経営について	吉村
193	日取真興義	沖縄県における養豚の振興計画に対する一考察	吉村
194	百木 孝司	埼玉県における養鶏の現状と展望	吉村
198	安田 武	乳価問題と酪農政策	吉村
214	中村 満	都市養豚における未利用残飯の有効利用に関する研究	吉村
249	田中 和博	オーストラリアにおける牛肉生産と貿易について	吉村
6	朝倉 正隆	熊本県における養鶏経営設計	桜井
14	有水 耕治	東円沢唐沢地区における本州鹿の季節的移動と生態	桜井 石島
25	今西 辰哉	宮崎県における和牛経営の実態と展望	桜井
43	小野 一三	輸入牛肉の流通機構について	桜井
50	金田 豊秋	肉用子牛生産経営の現状	桜井

65	小池 幸博	長野県のブロイラー生産についてー飯田、下伊那地区におけるー	桜井
125	大田 正人	新潟県における放牧酪農の現状と発展方向	桜井
139	中野 創	わが国の牛肉需給の現状と展望及び将来の牛肉生産	桜井
143	檜島 真	神奈川県藤野町における酪農の現状と将来	桜井
149	信時 勝	宮崎県における和牛の動向と展望ー西諸、小林地区におけるー	桜井
153	長谷川 要	新潟県における青刈稲の飼料利用状況と発展方向	桜井
203	山本 哲郎	畜産公害問題における家畜糞尿処理問題と有機農業に関する研究	桜井
215	山下 和美	草地型酪農と近郊酪農に於ける経営経済的比較研究	桜井
233	内海 智博	都市近郊における肉牛経営の現状と問題点	桜井

家畜飼養学研究室

今日我国の畜産界は、世界的な穀物需給不安定による飼料価格の値上りの懸念、食品安定上の要請からの配合

飼料添加物の規制強化など依然として厳しい環境にある。そのような中で飼養学及び飼養研の占める位置は、ますます重要になりつつある。

飼養学は、学問的分野としても広い範囲にわたっている。すなわち家畜飼養、管理、飼育という三本柱のもとに杉村敬一郎教授、伊藤澄磨助教授、栗原良雄講師を中心とした指導のもとに種々の研究活動を行なっている。主な研究テーマとしては、アミノ酸、脂肪酸、エネルギー代謝、一般飼料、飼育管理、牧草・飼料作物関係等がある。

研究室行事としては、富士農場に於ける畜産実習、群馬県畜産試験場に於ける家畜管理実習並びに、一般飼料成分々析演習等を行なっている。また室員相互の親睦を計るため、野球大会、研修旅行、餅つき大会等を行なっている。

現在の室員数は、杉村先生、伊藤先生、栗原先生、大学院生七名、四年生二十一名、三年生二十九名である。

7	芦田 芳徳	主題 飼料中のリノール酸・グリセリン量がおよぼす影響	副題 飼料中のリノール酸・グリセリン量がおよぼす影響	栗原 伊藤
4	明石 光正	主題 飼料中のリノール酸・グリセリン量がおよぼす影響	副題 飼料中のリノール酸・グリセリン量がおよぼす影響	栗原 伊藤

246	228	223	220	218	205	196
吉岡伸一郎	平久井好一	三宅佳孝	山田幸子	曾淑珠	湯本良一	森田義昭
副題	主題	副題	主題	副題	主題	副題
肉豚の産肉性の比較試験	並びに飼料効果に及ぼす影響について	サイレージの消化に及ぼすpHの影響について	サイレージの消化に及ぼすpHの影響について	サイレージの消化に及ぼすpHの影響について	サイレージの消化に及ぼすpHの影響について	サイレージの消化に及ぼすpHの影響について
(伸)	栗原藤	淡谷	栗原藤	栗原藤	栗原藤	栗原藤

142	119	110	104	87	64	45	9
長尾聰	田畑浩二	高下徹	鈴木順巳	佐藤道尚	黒木伸之	小幡幸正	阿部久幸
副主題	副主題	副主題	副主題	副主題	副主題	副主題	副主題
成育時の栄養に関する研究	成育時の栄養に関する研究	成育時の栄養に関する研究	成育時の栄養に関する研究	成育時の栄養に関する研究	成育時の栄養に関する研究	成育時の栄養に関する研究	成育時の栄養に関する研究
栗原藤	栗原藤	栗原藤	栗原藤	栗原藤	栗原藤	栗原藤	栗原藤

192	184	175	174	171	155	145
室谷敏彦	松丸隆	二見徹	二見薫	福島義明	羽田野泰治	西沢千春
副題	副題	副題	副題	副題	副題	副題
開封後のNO ₂ -N消失率	エネルギー源の差違とラット諸器官中の遊離アミノ酸の関係	高速道路の側面の利用に	飼料中の繊維がエネルギー代謝におよぼす影響	高速道路側面の利用に	食餌のエネルギーレベルとアミノ酸アンバランスの相互作用に関する研究	肉豚の発育と経済性の比較試験
栗原藤	栗原藤	栗原藤	栗原藤	栗原藤	栗原藤	栗原藤

家畜生理学研究室

昭和五十二年年度に家畜育種学研究室より分離独立した家畜生理学研究室は、渡辺誠喜教授、中島副手両先生の御指導のもとに、大学院生三名、博士課程前期一名、同課程後期二名、四年生十三名、三年生九名、二年生一名の畜産学科において最も新しい研究室であります。

当研究室の研究テーマは、(一)家畜家禽の内分泌に関する研究 (二)家畜家禽の代謝に関する生理遺伝学的研究 (三)家畜家禽の体液に関する免疫学的並びに血清学的研究 (四)家畜家禽の細胞膜に関する研究の四つに大別され、生理学的側面からの蛋白質生産性の向上を計ることを目的とし、室員全員がそれぞれ協力しあい各自の研究題目に向かつて邁進しています。

当研究室の特色としては、実験・研究に関しては、それぞれ厳しく指導が徹底されていますが、反面自由な時間には、無礼行の会話がかわされ学問のみならず人生論についても、先生をはじめ室員一同が論議する誠に居心地の良い研究室で、室員一同愉快に生活しています。

また、年間行事としては、新入室員歓迎会、週一回の室員によるゼミナール、学外講師による特別講演、草刈り実習、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生歓迎会などを行なっています。

15	池田 希幸	鶏の成長に伴なり血清蛋白量の變動	渡辺
22	井野 智規	産卵鶏の肝細胞内におけるエストロジェンレセプターに関する研究	渡辺
40	奥原 正志	高温環境がウズラの血液成分、糖、脂肪酸及び蛋白質に及ぼす影響	渡辺
58	木村 勝	鶏における飼育環境の生産形質に及ぼす影響	渡辺
67	小泉 雅則	マウスの音響ストレスに関する血液生理学的並びに生物物理学的研究、特に血液像と筋電図について	渡辺
78	小柳 弘茂	家兔血清中の酵素及び蛋白質の多型について	渡辺
99	鈴木 明彦	鶏の卵白蛋白における遺伝的多型現象について	渡辺
109	高沢 修	鶏の免疫グロブリンに関する研究、特に血清中の値による選抜と免疫担当臓器について	渡辺
126	遠山 信之	ホロホロチョウの同種血球免疫による血液型の種類	近藤 渡辺
154	畑 裕子	マダガスカル産原猿数種における血液蛋白質及び酵素の電気泳動法による研究	近藤 渡辺

159	早川麻由利	家兔血球中の酵素及び蛋白質の多型について	渡辺
207	横田二三夫	動物組織培養細胞間の薬剤感受性に関する細胞遺伝学的研究	渡辺
221	富士 敦子	ハタネズミの実験動物化に関する研究、消化管内のプロトシアの分類並びに血糖値について	渡辺
222	今村 浩士	緬羊赤血球膜の透過性に関する研究、特にGSH, Na並びにNa量について	渡辺
231	飯田 久善	ミツバチの体液に関する研究	渡辺

家畜繁殖学研究室

当研究室では、一戸教授、石島助教、門司助手、岸副手のもとに大学院生三名、四年生二十八名、三年生十三名の室員で構成され、家禽班、牛班、豚班、実験動物班の四班に分かれて、先生方の適切なアドバイスのもと、家畜繁殖の立場から、独自の研究を行なっています。また、研究室の中だけでなく、広い世界にも目を向け、特に近年は、フィリピン、スリランカ等の東南アジアにおける水牛、野鶏の研究が軌道に乗り、毎年室員を各地に派遣し、フィリピンにおける人工授精の確立、および在来鶏、野鶏の生理を繁殖学的に究明せんと日夜努力を

36	大塚 利雄	乳牛の妊娠期間についての考察	一戸
33	大久保日出世	受精卵移植によるラットの産仔数増加に関する研究	石島
21	伊藤 祐一	ホロホロ鳥精液の希釈保存液についての研究	一戸
5	秋元 良平	ゴールデンハムスター胚の子宮内転移に関する研究	石島
53	浦地伸太郎	River Buffalo Swamp (Carabao) の形態と繁殖状況	一戸
44	小野 芳弘	River Buffalo Swamp における精子の微細構造の差異について	一戸
55	菊地 武男	豚の発情徴候に関する考察	一戸
59	工藤健一郎	鶏における下垂体前葉 Gonadotropin 分泌細胞の組織学的変化について	一戸
61	栗原 政宏	沖縄県与那国島における畜産マウスにおける過排卵処理の反復が排卵反応および卵子の正常性に及ぼす影響	石島
75	小松 博道	鶏の排卵周期における卵胞膜組織並びに血液成分の変化について	一戸
76	小宮 登	外部生殖器異常豚の形態と核型について	一戸
82	斉藤 英夫	豚における人工授精の現状と将来性について	一戸
115	田中 一廉	ラットにおける受精卵の非外科的採卵および移植に関する研究	石島

39	奥田 武二	Swamp Buffalo (Philippine Carabao) の形態と繁殖状況	一戸
44	小野 芳弘	River Buffalo Swamp における精子の微細構造の差異について	一戸
53	浦地伸太郎	River Buffalo (Muyah Buffalo) の精液性状と凍結保存について	一戸
55	菊地 武男	豚の発情徴候に関する考察	一戸
59	工藤健一郎	鶏における下垂体前葉 Gonadotropin 分泌細胞の組織学的変化について	一戸
61	栗原 政宏	沖縄県与那国島における畜産マウスにおける過排卵処理の反復が排卵反応および卵子の正常性に及ぼす影響	石島
75	小松 博道	鶏の排卵周期における卵胞膜組織並びに血液成分の変化について	一戸
76	小宮 登	外部生殖器異常豚の形態と核型について	一戸
82	斉藤 英夫	豚における人工授精の現状と将来性について	一戸
115	田中 一廉	ラットにおける受精卵の非外科的採卵および移植に関する研究	石島

積み重ねています。

室員が海外へ出向く事は、相手国と日本との親睦を深め、国際交流上高い評価が期待されまことに一石二鳥の研究と云えます。

さらにお互いの知識を深める意味で、各班ごとに毎週一回のゼミナールを開き、文献を読んだの討論、最新情報処理が、問題解決には昼夜を問わず追求するという向学心をより一層高めています。

室員の横の関係はもちろんの事、縦の関係も礼儀を重んじる室風につちかわれ、より深いものとなっています。この様な活動の他に毎日の当番制による各班の飼育管理、合同ゼミナール、日本鶏審査会への参加、卒業論文発表、新入室員歓迎会、ソフトボール大会、収穫祭参加(文化芸術展示会、模擬店)、卒業生送別会、等これらの行事に室員は全員参加で、より充実したものとなるようにエネルギーな活動を行なっています。

131	道田 肇	日本ウズラにおける血中ビリテ ン値と産卵性について	一戸
136	中倉 敬三	外国産ポニーに関する研究	一戸
141	中村 哲也	牛卵胞卵の体外培養及びその授 精に関する研究	一戸
144	縄田 行秋	鶏の卵胞膜におけるLH・FSH プロラクチン添加に伴うステロ イドホルモン合成への影響	一戸
150	野本 隆司	家兎における未受精卵の凍結保 存に関する研究	石島
152	橋本 豊博	豚精液の凍結保存における適正 希釈液の究明	一戸
157	花城 清泰	スナネズミ卵子の初期発生に及 ぼす過排卵処理の影響	石島
166	平井 利昌	日本鶏における就巢性誘起実験 の改善に関する研究	一戸
177	八月朔日記織	反復過排卵処理家兎の反応低下 の改善に関する研究	石島
178	本間 健郎	若令雄牛における生殖器の発達 段階について	一戸
183	松原 弘	過排卵処理マウスの胎仔死亡の 要因に関する研究	石島
185	松本 勉	ウズラの産卵機能と血中脂質濃 度との関係について	一戸
191	東 房男	家兎胚の凍結保存に関する研究	石島

204	柚木崎 靖	豚精液の低温保存における適正 希釈液の究明	一戸
204	池田 一彦	宮城県仙南地方における繁殖障 害牛の実態調査	一戸
232	角田 誠	ドバト公害対策実験	一戸
239	岡村隆太郎	牛乳の流通過程における研究	一戸
248	竹下 孝志	鶏におけるプロラクチンの投与 が排卵および血中プロジェステ ロン濃度に及ぼす影響	一戸

畜産物利用学（肉）研究室

本研究室は、「肉研」と呼ばれ、教授の鬼原新之丞先
生、講師の松岡昭善先生を両翼に、四年次生、二十三名、
三年次生、二十三名、二年次生、一名、で構成されてい
る。

各人には、学究的態度の保持、研究室内に於いては、
隔絶の無い雰囲気醸成することを信条としている。

上級生と下級生の明確な区別はせず、互いに助け合
い、睦じく実験、製造実習、問題の解明追究、遊戯に励ん
でいる。

上級者なるものは、微細にわたつての肉の化学、各種
実験方法を教示し、下級生なるものは、卒業論文の手伝
い等、実験の潤滑油として活躍している。

3	青島 誠	ホロホロ鳥肉の特性 生長時における肉質の変化	鬼原 西脇
11	安部 泰子	冷凍肉の解凍に関する実験	鬼原
42	小内 満	鶏肉の再凍結に関する研究	鬼原
48	加藤 嘉彦	豚肉の塩漬に関する研究	鬼原
88	佐野 高二	myofibril protein の塩漬 ・燻煙における挙動	松岡
90	志賀 正	肉製品（ハム・ソーセージ）の 冷凍期間中における変化に関す る研究	鬼原
91	篠原 昌明	紫外線が肉及び肉製品におよぼ す影響について	鬼原
202	山下 幸一	豚肉の凍結保存に関する研究 と殺後の経過時間の差が再凍結 肉の肉質に及ぼす影響	鬼原
105	鈴木 祐次	ポークソーセージの保存性向上 に関する研究	鬼原
112	高橋左枝子	豚肉の再凍結に関する研究 再凍結肉のmyofibrillar proteinに及ぼす加熱の影響	松岡

問題解決には、昼夜を問わず追求するという室風が、
我々の向学心を躍起させる。
また、十一月には新役員も決まり、各人が自覚を持っ
て、研究室の運営にあたつてゐる。

畜産物（乳）利用学研究室

当研究室は、室長の山中良忠助教授、古川徳講師の両
氏のもとに四年生九人、三年生三人、準室員一人という
少数ながらも協力しあつて楽しく研究に励んでいます。
主な活動は乳、乳製品及び卵、卵製品に関する理化学
的、細菌学的研究であり、クリーンベンチ、ガスクロマ
トグラフィー、分光光度計等が完備され高度な研究を可
能にしています。

又、卵の分野への研究を進めるとともに各種蛋白質材
と乳、乳製品への利用等の研究も行なわれています。

本学卒業生で乳業関係に従事している方々の親睦会で
ある「楽乳会」を通じて先輩諸兄の御指導をいただい
ております。

畜友会だより

昭和54年度畜友会行事報告

- 1月10日 昭和54年度畜友会活動開始
- 1月20日 4年生送別会
- 3月20日 卒業生記念品贈呈
- 4月7日 入学式において畜友会の説明
- 4月13日 新入生オリエンテーションにおいて畜友会の説明
- 4月14日 役員補充(八重樫)
- 4月18日 クラス役員選出 会計監査委員選出
選挙管理委員選出 規約改正委員選出
- 4月20日 新入生歓迎会(四号館共通実験室)
- 4月23日 役員補充(倉橋, 宮入, 吉田, 大矢)
- 4月22~30日 農友会会長杯争奪ソフトボール大会
- 5月20日 ソフトボール大会
- 6月~7月 夏期個人農場リスト作成及び紹介
- 6月9~20日 学内スポーツ大会
- 7月20日 「ふじみの」編集委員会発足
- 8月8日 一年生厚木農場実習において収穫祭の説明
- 9月22日 「ふじみの」原稿募集
- 9月25~27日 第10回農大盆踊り大会参加
- 9月25日 役員補充(柳井)
- 9月25日 畜産学科第87回収穫祭実行委員会発足
- 10月6日 収穫祭本部開き
(畜産学科第87回収穫祭統一本部発足)
- 10月31日~11月4日 収穫祭
- 11月26日 昭和54年度畜友会総会(視聴覚ホール)

- 安達 佳子 液状全卵の酵素活性低下による加熱程度の判定法に関する研究
- 阿部 信行 蛋白質素材の乳化力に関する研究
- 小林 宣隆 カゼインコンプレックスと乳糖との相互作用について
- 小林 信義 未殺菌(殺菌)液卵のサルモネラ汚染と一般細菌汚染の相関性に関する研究
- 佐藤 健夫 アルデヒドと糖の添加が乳製品の熱安定性に及ぼす影響
- 杉本 幸雄 原料乳中の低温細菌汚染と中温細菌汚染の相関性について
- 鈴木 敏弘 カゼインの糖結含量が溶解度に及ぼす影響
- 山本 正 古川 山川 古川 古川 山川 古川 山川 古川 山川

◎主な行事

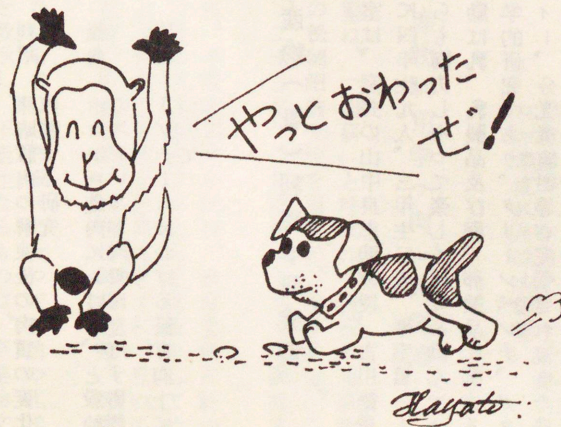
- ゼミナール
- 新入室員歓迎会
- 夏期乳製品製造実習
- 収穫祭参加
- 室員旅行
- 卒業論文発表会
- 卒業生送別会

147 129

根石 友田
吉市 伸子

Actinomyces 属によるコレステロールの分解性について
粉乳貯蔵中におけるラクトース、

古川 山川



第87回収穫祭畜産学科会計報告

収入の部

畜友会よりの援助金	300,000
前夜祭本部よりの援助金	18,000
体育祭本部よりの援助金	42,000
特別企画本部よりの援助金	42,040
収穫祭本部より北門への援助金	135,000
	<hr/>
	537,040

支出の部

	予算	援助金	決算
総務費	120,000		125,648
北門		135,000	137,250
前夜祭	10,000	18,000	40,770
体育祭	50,000	42,000	104,400
特別企画	30,000	42,040	84,052
宣伝ストーム	60,000		76,140
文化展	30,000		25,000
	<hr/>		
	300,000	237,040	593,260

(収入総額) 537,040円 - (支出総額) 593,260円 = -56,220円 (赤字)

※赤字分は畜友会より補助されたい。

上記相違ない事認めます。

4年 檜島 真

2年 松本 末広

3年 中野 克己

1年 岩崎 洋一

昭和54年度畜友会会計報告

収入の部

前年度繰越金	331,295
新入生(175名×5,000円)	875,000
編入生(5名×2,500円)	12,500
利息	3,742
その他	13,100
	<hr/>
	1,235,637

支出の部

	予算(円)	決算(円)
卒業生送別会費	53,006	53,006
卒業生記念品費	76,140	76,140
新入生オリエンテーション費	20,000	16,500
新入生歓迎会費	70,000	89,363
ふじみの18号印刷費	320,000	320,000
講演会費	20,000	0
スポーツ大会費	40,000	23,050
学科旗製作費	100,000	68,000
農場リスト費	5,000	700
収穫祭説明会費	20,000	25,900
収穫祭援助費	300,000	300,000
コンパ援助費	40,000	0
事務費	50,000	29,715
予備費	104,649	93,220
	<hr/>	
	1,218,795	1,095,594

(収入総額) 1,235,637円 - (支出総額) 1,095,594円 = 140,043円

上記相違ないことを認めます。

会計監査委員

4年 檜島 真

4年 松本 末広

3年 中野 克己

1年 岩崎 洋一

昭和五十四年度第八七回收穫祭
畜産学科統一本部役員

○統一委員長	伊藤達美	3年
副委員長	横田千春	3年
副委員長	小椋勇人	2年
○宣伝ストーム統一委員長	小椋勇人	2年
副委員長	宮入淳	1年
○前夜祭統一委員長	小椋勇人	2年
○特別企画統一委員長	加藤新悦	2年
副委員長	八重樫哲	1年
○体育祭統一委員長	萩野朋美	2年
副委員長	倉橋正己	1年
○北門アーチ統一委員長	橋本彰人	2年
副委員長	柳井篤司	1年
○文展模擬店統一委員長	村瀬正	3年
○会計	吉田敏男	1年
○家畜苑統一委員長	岡部道成	3年
副委員長	横田千春	3年

昭和五十四年度畜友会役員

委員長	伊藤達美	3年	(飼養研)
副委員長	横田千春	3年	(衛生研)
副委員長	小椋勇人	2年	(衛生研)
會計	加藤新悦	2年	(育種研)
會計補佐	岡部道成	3年	(繁殖研)
企画	宮入淳	1年	
企画	倉橋正己	1年	
書記	八重樫哲	1年	
渉外	佐藤朱美	2年	
渉外	村瀬正	3年	(衛生研)
庶務	吉田敏男	1年	(繁殖研)
庶務	緑川宏子	2年	(経営研)
會計監査	大矢一茂	1年	(繁殖研)
	榎島真	4年	
	中野克己	3年	
	松本末広	2年	
	岩崎洋一	1年	

東京農業大学畜産学科
"畜友会"規約

第一章 総則

第一条 本会は東京農業大学畜友会と称す。

第二条 本会は東京農業大学在学学生、教職員、及び卒業生をもつて、相互の親睦をはかり、本学の発展に寄与することを目的とする。

第三条 本会の事務所は、東京農業大学畜産学科本部におく。

第二章 会員

第四条 本会の会員は左記の三種をもつて組織する。

一、正会員

二、特別会員

三、名誉会員

正会員は東京農業大学畜産学科在学学生、特別会員は東京農業大学畜産学科卒業生、並びに教職員。名誉会員は役員委嘱により承認を得たもの。

第五条 会員が本会の業務執行妨害あるいは名誉を失せる行為をした時は総会の議決により除名する。

第三章 役員及び機関

第六条 本会は左記の役員をおく。

一、委員長一名、副委員長二名、書記二名、會計一名、會計補佐一名、渉外二名、企画三名、庶務二名

二、一年クラス委員四名、二年クラス委員四名、研究室委員八名

三、監査員四名

第七条 本会は顧問をおき、畜産学科長ならびに畜産学科主事が此の任にあたる。

第八条 一、委員長、副委員長、書記、渉外、企画、庶務は選挙によつて、計十四名選出する。なお選挙規約は別に定める。

二、第六条第二項、第三項に定められた役員は一、二年二名、各研究室一名ずつ、監査委員は各学年一名ずつ選出する。

(なお、専攻生は、各研究室員の中に含まれる。)

三、欠員が生じた場合は、速やかに補充しなければならぬ。

第九条 役員任期は原則として一年とする。

第十条 総会は正会員より構成され、本会の最高決議機関とする。

第十一条 総会は正会員の三分の一以上より成立する。

- 二、委任状は署名捺印（拇印を含む）を必要とし、議長に一任する。
 - 三、委員状は総会に際し定足数に含まれる。但し、委任状は議長委任とし、正会員総数の四分の一までとする。
 - 四、委任状の検査は役員が行なう。
 - 五、本条文は昭和四十三年十二月十八日をもって追加し即日効力を発する。
- 第十二条 定期総会は年一回十一月に召集する。臨時総会は左記に該当した場合一ヶ月以内に召集しなければならぬ。
- 一、正会員の四分の一以上の同意を得て、開催目的及び召集理由を記載し委員長に提出あるとき。
 - 二、役員は三分の二以上が必要と認めるとき、総会の開催は五日前に公示しなければならぬ。
- 第十四条 総会における議長は、総会においてその都度互選する。必要に応じて議長は副議長を指名する。
- 第十五条 総会の議決は、出席者の過半数によつて議決され、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- 第十六条 総会の過半数により、役員の不信任を可決できる。

- 第六章 監 査
- 第二十四条 本会の業務を円滑、正常化する為監査委員をおく。
- 第二十五条 監査委員は、前条の目的達成の為、年度末に会計監査を行なう。監査は監査委員が必要と認めれば随時できる。
- 第二十六条 監査委員は第六条第一項、第二項の役員に兼任は出来ぬ。
- 第七章 附 則
- 第二十七条 本規定解釈の疑義は、委員会において、最終的解釈する。
- 第二十八条 本規定の改正、及び追加は総会においておこなう。
- 第二十九条 本規定は昭和三十五年六月二十九日より施行する。

- 第四章 業 務
- 第十七条 第六条第一項、第二項に定められた役員は本会の最高執行機関たる委員会を構成し、此の召集を委員長が行なう。
- 第十八条 本会の事業年度及び会計年度は十二月一日より翌年十一月末日までとする。
- 第十九条 本会は左記の業務を行なう。
- 一、会員親睦会
 - 二、講習会及び研究発表会
 - 三、見学調査
 - 四、機関紙の発行
 - 五、その他第二条に附帯する業務
- 第五章 会 計
- 第二十条 会費は年間二〇〇〇円とする。その納入は四年分一括し、入学時に納入のこと。
- 第二十一条 本会の運営は会員の納入する会費で運営する。但し第十九条の業務執行にあたり臨時徴収する場合もある。寄附行為は認める。
- 第二十二条 納入金の払い戻しは行なわぬ。
- 第二十三条 但し入学取消しの場合はその限りではない。決算報告は十月末日までに作成し公示する。承認は定期総会において行なう。

畜友会選挙規定

- 第一章 総 則
- 第一条 この規定は、畜友会役員選挙に関し、選挙が公明、且つ円滑に行なわれることを目的とする。
- 第二条 この規定は、畜友会規定第六条第一項に基づく役員選挙に適用される。
- 第二章 選挙管理委員会
- 第三条 第一条の目的を達するため、東京農業大学畜友会選挙管理委員会を設置する。（以下本会又は単に選挙管理委員会と呼ぶ。）
- 第四条 本会は、畜友会役員選出に關して全ての権限を有する。
- 第五条 本会の委員は、各学年より一名ずつ選出し、委員長はその中より互選する。ただし、これに畜友会役員、及び被選挙人は兼任できない。
- ただし、各学年の在籍数の過半数によつて選挙は成立し、三分の二以上の挙手二名以上の場合は挙手をもつて最高点を当選とする。
- 第六条 本会の委員の任期は原則として、畜友会の

第七條 事業年度に準ずるものとする。

第八條 本会は選挙が公明且つ適正に行なわれるように常にあらゆる機会を通じて、公示及び選挙期日、方法、その他必要と認める事項を畜友会会員に周知させなければならぬ。畜友会規定第十六条によつて、畜友会役員の不信任を審査し、成立した場合には、本会は新たに役員を選挙を行なう。

第三章 選挙

第九條 選挙はクラス、研究室の移動投票により行なう。

第十條 一、投票期日並びその期間は事業年度終了日以前の日時を原則とし、選挙管理委員会がこれを定める。
なお、不測の事態が生じた場合は、選挙管理委員会が決するところによる。

第十一條 二、畜友会役員の不信任が成立した場合には、二週間以内に選挙を行なう。

第十二條 選挙管理委員会は投票日の十日前に公示しなければならぬ。

第十三條 選挙人は、及び被選挙人は、畜友会正会員とする。

第十四條 選挙は立候補制とし推薦者一名を必要とする。

第十五條 当選は有効投票数の上位の委員定数までの者とする。

第十六條 立候補者が定数のときは信任投票を行ない有効投票数の過半数をもつて当選とする。

第十七條 選挙管理委員会は開票後二日以内に適当な方法をもつて、当選者を公表しなければならぬ。

第十八條 選挙管理委員会は選挙記録を作成し、一年以上保管する。

第十九條 選挙管理委員会は畜友会会員に選挙記録の提示を求められた時には、いかなる事情があつてもこれに応じなければならぬ。

第四章 予算及び監査

第二十条 畜友会は選挙管理委員会の必要とする経費を支出しなければならない。

第二十一条 選挙管理委員会は年度末に畜友会会計監査委員の監査をうける。

第五章 改正

第二十二条 本規定は畜友会総会において三分の二以上の賛成をもつて成立する。

第二十三条 本規定に疑義が生じた時は、選挙管理委員会が最終的に解釈する。

第二十四条 本規定は昭和五十年四月一日より施行する。

第十四條 選挙管理委員会は立候補者に対して選挙宣傳の為、適切な援助を与えるものとする。

第十五條 投票に関しては左記の規定に基づいて行なう。
(イ) 投票は同一投票用紙において役員十四名については無記名で投票する。
(ロ) 投票は選挙管理委員会の定める用紙により行なう。

(ハ) 代理投票及び不在者投票は認めない。
(ニ) 投票箱は厳重に封鎖されたものを用い、投票終了後は封印され、開票時まで開くことはない。

(ホ) 投票場は選挙管理委員会が定める。
(ヘ) 開票は全投票終了後、ただちに行なう。

第十六條 開票は選挙管理委員会の定める場所において、立候補者またはその代理人の立合いのもとで行なう。

第十七條 左記の投票は無効とする。
(イ) 正規の投票用紙を用いていないもの。
(ロ) 立候補者以外の氏名を記入しているもの。

(ハ) 選挙管理委員会が不明と認められたもの。
(ニ) 畜友会正会員の二分の一をもつて最低投票数とし、これに満たないとき、選挙は無効とする。

第十八條 選挙は無効とする。

第十九條 選挙は無効とする。

編集部では「ふじみの」第二十号の原稿を募集致しております。より一層充実したものとす為にも、名誉会員、特別会員、学生多数の御協力をお願いします。

記

募集期間 五十五年九月～十一月下旬
要項 ○論文、随筆、紀行文、主張
四〇〇字詰、十枚以内

○写真カット、は随意
○表紙図案、三色以内

宛名 東京都世田谷区桜丘一―一―一
東京農業大学畜産学科内 畜友会

ふじみの編集委員会行

発行日 昭和五十六年一月予定

応募原稿は一切お返し致しません。

畜友会「ふじみの」

編集委員会
〒(四二〇)二二三一(呼)

編集後記

“第19号”ふじみの発行に当り、会員の皆様方に、満足の頂けるよう編集員一同一丸となりふじみの編集に取りかかりました。その結果嬉しいことに各方面より内容豊富な原稿を多数頂くことができました。

来年は“ふじみの”もいよいよ二十号発行で人間で言えば成人を迎えることになりました。

これからも“ふじみの”発展の為に皆様畜友会会員一同の積極的な参加をお願い致します。

最後に我々委員一同の至らない点を深くお詫びすると共に、お忙しい中原稿をお寄せいただいた諸先生ならびに学外の皆様、会員諸氏に深く感謝致します。

編集委員一同

昭和55年1月	日発行	発行所	東京都世田谷区桜丘1-1-1 東京農業大学畜友会 電話(420)2131(呼)
“ふじみの”第19号			
編集責任者	橋本彰人	印刷所	世田谷区経堂1-6-13 エルデ・タイプ社 電話(429)1067
発行者	伊藤達美		

